●本紙は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

世界婦人

男女道を異にす

今の世は男女をして其道を異にせしめんとする也、男女をして相背反せしめんとする也、男女互に手を携へ、相助け相和すること能はざるは今の世態也、男女相愛すれども相和すること能はざるは現代の實狀也、戀愛は人生自然の感情にして、男女間の愛情が、男子間又は女子間の愛情と異なりたる一種熱烈なる執着力を有するは、動かす可らざる事實也、然るに現在に於ては相愛するもの必ずしも相結ぶこと能はず、相結べるもの必ずしも之を永續する能はず、素より萬難を排して究局其戀愛を成就する者存せざるに非ずと雖ども、斯の如きは九牛の一毛にも足らず、元來人の意志は軟弱なるものなり、殊に情に走り易き女子に於て然り、現代の如く、生活難の怖ろしき社會に於て、戀愛の失敗者多き、殊に婦人の失敗者多きは、素と當然の事理と言ふべし。

然れども、此生活難を防止するの策は、到底之を社會の根本的革命に待たざる可らず、從て之を一朝一夕に成就すべからざるは明かなり、然るに斯の如く、戀愛の滿足を得ること甚だ困難なる、從て夫婦の不和離婚等の事實夥だしき時に當つて、殊に婦人の最も苦痛を感ずるは今日の法律制度なり、今日の如く、社會組織其ものが既に堪え難き程の苦痛を吾等に負はすに係らず、更に之に加ふるに、現行の刑法民法が吾等婦人を蔑視し、吾等婦人を虐待することの甚だし。

見よ、日本の刑法は『有夫の婦、姦通したる時は一年以下の懲役に處す』と規定しながら、有婦の夫に對しては何等の規定をも設けざるに非ずや、而して民法には『妻が姦通を爲したる時』は夫より『離婚の訴を提起することを得』と規定しながら、夫が姦通したる場合を規定せざるに非ずや。夫れ社會組織の不完全なるが爲に圓滿なる戀愛の結婚を見る能はざるは前述の如し、而して此の如き境遇に成れる結婚に不愉快なる結果を齎らすべきは素より見るべからざる處、然るに此の如き場合にも男子は其鬱を他の婦人に散ずるの自由を有する也、有婦の夫が其妻女の前にて公然他の婦人と戲るゝも何等の犯罪をも成立せざる也、而して其妻女は如何に斷腸の苦惱を覺ゆるとも自ら離婚の請求を提出する權利無き也、非理非道、是れより甚だしきもの何處にかある。

されど吾等は、夫の如く妻にも姦通の權利を與へよと言ふものに非ず、蓋し妻が他男と姦通したる時は、既に其夫婦間には戀愛無きものと見るを得べく、從て其夫に與ふるに離婚權を以てするは當然の事なれば也、然れども、夫が他の婦人と通じたる時に、何等の罪をも成立せしめざると既に甚だ非理なるのみならず、此場合に於て妻に離婚權を與へざるは更に非理の甚だしきものならずや、戀愛は神聖なり、爲に無戀愛の結婚は罪惡なり、僞善なり、夫にして既に他の婦人と通ぜるの事實あらんか、社會は其妻に對して何ぞ其婚姻を繼續せしむるの權利無し、況んや、其夫に與ふるに離婚權を以てせるに於てをや。

以上は日本の法律が男女の差別を立てたる一例に過ぎず、此外、夫婦財産制の上に、相續權の上に、公法上の權能の上に、小兒に對する權能の上に、女子を輕視せるの點は之を枚擧するに遑あらず。

要するに、今日の社會、今日の法律、今日の習慣は、女子を以て男子の奴隷の如く見做すなり、今日の女子にして若し少しく自己の地位を覺り、女子の使命を發揮せんと欲せば、世の所謂紳士貴族諸君は皆な尠からざる迫害を蒙らざるを得ず、從て女子の覺醒には皆な眉を顰むるなり、女權の擴張には極力反對する也、曩きに帝國議會に對し、姦通及び離婚の條に訂正を加へんとするの請願出されしに、墮落せる議員等の嘲笑の間に埋り去られしもの素より當然といふべし。

到底今日の社會に於ては、男と女とは其道を異にするなり、婦人問題を解決せんと欲せば宜しく婦人自ら奮起するを要す、新帝國議會の開期も將に近かんとす、議員等に對して一策を加ふるの用意無らんや。

▲本號要目▼

△男女道を異にす　福田英
△野の秋（長詩）　素風女
△吾は逝く身（長詩）　白衣人
△南洋の日本醜業婦　海内蟀亭
△馬券禁止　同前
△秋（短句）　竹涼
△土國婦人の自由　海外蟀亭
△墺國社會黨婦人大會　同前
△高き月謝高き人格　小野有香
△空裡光　南無百附無十餘人
△友のかへしに（長詩）　孤舟
△筑波紀行　渡邊博
△雲（長詩）　有香
△放浪（ゴーリキイ）　晃折生
△露國社會主義史　石川旭山
△色即是空（雜纂）　兜者
△魔（モーパツサン）　二葉庵覺非
△秋十句　可笑

○零露聲無く、秋夜死せるが如し、我死して此秋夜に來れるか、死せる秋夜、却て我を葬れるか、されど我が戀人は尚ほ我を抱きて離さず、戀人は生くる也、我が心、亦淺からず戀人を慕ふ、我も未だ死せるに非ず

○釋尊曰く『女に五の力あり、一には色の力、二には親族の力、三には田業の力、四には兒の力、五には自守の力なり、此五力を以て夫主を輕んじ慢る、然れども唯夫主の富み貴き一の力は、能く女を蔽ふ』と。あゝ唯だ此の『一の力』は實に是れ古今に通じて婦人屈辱の刑冠なりと言ふべし

○女子にのみ虛榮心多しとなすは大なる過也、唯だ男子に頼りて榮華を得んとするが故に女子のみ獨り虛榮心深きが如く見ゆる也、然ども女子の虛榮心は尚ほ憐れむべきものあり、彼の平民勞働者の腕を扼して以て獨り榮華を貪らんとする貴族富豪の虛榮心に至りては、一點の恕すべき所を見ず。

○朝日射して我が枕邊を照破するの時、其寢亂れ髮を男に見せて眼醒めざる女は、必ずや男に見棄てらるゝの運命を負ふ、然らずんば、男子を坐布團の如く其臀下に敷いて主婦とせんか、其家は必ず早晩破滅に歸するものと知るべし。

○途上に行く女子を見る、其反身となる者、其大路に歩む者、近時益々多きが如し、蓋し女子體育の上に益する所大なるべし、然れども、之を以て女子の智識進歩せるの徵證となすは甚だ愚なり、近時の女學生が一般に未だ智識に於て其思想に於て淺薄浮躁に傾けるは實に吾等の見のみに非ざるべし、況んや、其德操に於てをや。

鹿のこゑ絶えて淋しき山の奥に
もみぢ踏みわけ獵師なくり　（田中霞）

野の秋　素風女

岡また岡　林また林
溝越えて　稻田廻りて
うねり〱　盡きぬ野分路。

黒く暗き　薮垣たかく
幽かに光る　燈火の如く
杉の枝に　朱き烏うり

小黄菊咲き　鷄頭血の如く
參差として　叢なす小塚に
墓墳一基　氣高くもあるか。

眞晝なるに　戀人を呼ぶか
露の情　早や盡きんするか
虫の鳴く音　などかく淋しさ。

水の流　潺々として去る
岡や林や　昏々と眠る
我は獨り　何處にか行くよ。

吾は逝く身　白衣

いや麗しの花　地に消よや
かゝやかし艶色こそ　煩悶えのたね
よも接吻はならじ　われは逝く身。

霜凍る冬なれば　夜こそさみし
身は『智慧』にむしばみつ　煤びゆくか
胸の血いこと〱と　乾涸ぶ音。

風に乘る目無鳥　闇に飛べや
大川のゆるき流れの　香もなくて
すゝはみて乾涸びて　吾は逝く身

あとけなき己が心なたさりつゝ
神のおしへのまゝな其まゝ　（田中霞）

●女子大に讀むべく男子盛んに讀まざる可からず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海内時事

馬劵禁止事件

馬劵禁止事件が去月中日本の經濟界と一般の人心を動搖させた事は甚だしいものであつた、折しも米國實業家並びに米國艦隊の歡迎に人民熱狂せし爲め、事件は世間から忘られて了つたが、一時は社會の一大問題となるそうであつた、先年世間に[illegible]せられた教科書事件と共に明治歷史の上の汚中の醜汚點と申すべきである。

併し此の如きとは、社會に大運動の來らんとする時代に必ず生起する事件で、西洋にはモット重大なる事例が多くある、彼の十八世紀開幕に[illegible]國に起りたる南海商業、即ち有名なる [illegible] の如き又其時代に佛國に起りたるミスシッピー企業の如き、何れも其初め政府指揮の下に盛んに投機的商業の事業を起して經濟界を攪り、以て政府財政の補助に供した處が、弊害百出して政府自ら之を制止するの止むなきに至つた、そして政府の態度が俄かにまた爲に何れの場合にも經濟界に挽回すべからざる悲境に陷つた、之は實に英國の商業改革、佛國の政治革命を豫報したる警鐘として史家の注意する處である。

最も眞面目に金錢を取扱ふべき經濟界、實業界に、今日の如く賭博心の横溢するを見るは蓋し前代未曾有であろう、アレ程の大賭博の競馬が、白晝公然帝都の下に行はれ、而も天下に有名なる軍人や實業家や政治家が之に熱狂したと云ふとは決して容易に看過することが出來ぬ。

事の勝負といふとも、普通の勞働に疲れた人々が、時に相會して一日の興に行ふたら甚だ結構な面白いとであろう、ケレども之が爲に金錢を賭し、事業を怠るに至つては其弊や甚だしといはねばならぬ、況して今日の競馬の如き、之に與る者は多く細民勞働者の膏血を搾りて遊蕩に日を暮らす紳士家族の徒輩である、彼の現内閣すら之を看過することが、出來なくなつたのを見れば其醜狀の如何に醜いか知るべきである。

賭博は勞働を厭ふ者の爲すとである、勞働を厭ふ者の多きは勞働が何より賤しめられ、又、[illegible]が人心に厭惡を與ふるからである、勞働の生活が不愉快な[illegible]な最大の原因は、勞働が勞働[illegible]なされないからである、賃銀[illegible]の爲に、[illegible]ものなんかで[illegible]併し勞働は[illegible]生活にせねばなら[illegible]には[illegible]入るソコ、勞働せ[illegible]に[illegible]提供といふことになる、ヨリ[illegible]をするにはヨリ大なる[illegible]することになる。

今[illegible]の方に向いて[illegible]、[illegible]之れ[illegible]平和を持[illegible]ので[illegible]あろうか、政府自ら競馬を奬勵しながら[illegible]馬劵[illegible]は素より甚だ[illegible]、[illegible]は事件によつて、天下の[illegible]れど、[illegible]何れの方面に向つて[illegible]かを[illegible]することが出來やう。

米艦の歡迎

[illegible]日本[illegible]の政策よりすれば、今[illegible]の米艦[illegible]歡迎[illegible]たるべきとであろう、久く日米間に[illegible]の蟠つて居た今日に此の如き和樂の[illegible]を見るは[illegible]の爲に[illegible]も無[illegible]ばしいとであるとは[illegible]のみならず、[illegible]列[illegible]民が等しく感ずる所であろう、併し能く〳〵考えて見ると此事が日米の平民勞働者に對して果して如何なる[illegible]を持つて居るものであるかは疑問である。

素より國際の平和は尊ぶべき事である、平和なれば産業が盛大になる、産業が盛大なれば勞働需要が多くなる、需要が多くなれば從て賃銀も高くなるといふ譯だ、併し國際の不和が起つたとであろうか、平民勞働者は固よりコンなとに與らない、殊に吾々平民婦人は殆んど全く關係がない、思ふに之は外國と戰つて功名を得んとする政治家や軍人や、或は外國に市場を求むる資本家出帥の一族の欲する所である。

コンな類の人々が戰爭を希望して、たびたび[illegible]今度[illegible]他國の紛爭を招く、[illegible]これては[illegible]なれば此に[illegible]獻を飲むの必要が起る、今回の米艦歡[illegible]コレ丈なる[illegible]あるまいか、[illegible]何十萬圓[illegible]百萬圓と[illegible]何にして出來た[illegible]ものであろう、[illegible]かで[illegible]殊に[illegible]は、[illegible]を[illegible]して[illegible]である、勞働者に[illegible]

南洋の日本醜業婦

不良に[illegible]ず、猖獗に[illegible]、正氣の[illegible]人の[illegible]、[illegible]風吹る[illegible]、[illegible]に[illegible]れて哀れ鬼にも[illegible]に[illegible]なり果つるのである、此頃二六新聞に連載され[illegible]る「[illegible]醜業婦」は彼[illegible]諸の慘狀醜狀を序して居る、醜業婦[illegible]諸君、[illegible]生活の一端を知り給はゞいかで[illegible]改革の事を一日も猶豫することが出來ましやうぞ、左に其記事の一部を借用する。

▲奇●妙●な●る●服●裝● マニラ市は英國の法律で遊郭を許可せられないから淺草の銘酒屋のやうな者が邦人の經營が十五六軒露人の經營が二軒其他馬來人の經營して居るのか五六軒あるが何れも洋館の高樓で此處へ賣られた彼等は毎夜椅子に倚つて日本風に店を張つて居る其服裝は馬鹿々々しい派手で牡丹に唐獅子虎に龍など恰も支那に輸出さるる人力車のやうな模樣のある衣服を着て兵兒帶を前でだらしなく結んで居るが最も不思議なのは緋に[illegible]要緋の裏を着けて居るのさへある。

▲彼●等●の●收●入● 此化物然たる醜業婦を買ふのには白人及日本人は[illegible]十五圓で、土人及支那人には三圓位[illegible]此半分が女の收入となるから▼マニラなどでは彼等が一ヶ月の收入千圓近くになる事は珍らしくない而して支出といふのは僅少數が一ヶ月に金五圓[illegible]病の際に保險を[illegible]く協濟會に金一圓を納めれば可いので而して彼等は[illegible]容と[illegible]思つて居ないので有る之に反してボルネオに賣られる所謂[illegible]は一ヶ月九十圓程の收入しかないから[illegible]は十圓程にしか[illegible]ない其[illegible]由[illegible]は甚だ[illegible]大工等の妻となり或は白人土人等の[illegible]になる者が多い。

▲悲●慘●の●生●涯● 斯くの如き醜業に從事し我肉を賣つて得る彼等の收入は決して[illegible]から[illegible]ない、[illegible]十年一ヶ年に九州島原の[illegible]した額丈けでも三十萬圓の巨額に達して居た、而か[illegible]は[illegible]で果てるの[illegible]に溺れ[illegible]二[illegible]の[illegible]を[illegible]ての[illegible]大方[illegible]を[illegible]に[illegible]する[illegible]なる[illegible]を遂ぐるのである。

▲炭●礦●炭●坑●夫●の●不●穩● 多賀郡[illegible]炭坑夫二百名[illegible]り二派に分れて將に暴擧に出でんとし形勢不穩の爲め其筋にては非常召集を爲し警戒中なり右は[illegible]谷社長洋行不在中山口業務執行社員が勝手に[illegible]田某と賃貸借の公正證書を取換し飯場頭を買收して炭山を占領せし以來紛擾し居りしに基く

秋

竹[illegible]

駄馬と我と默して露の徑哉
海魚釣の立つては岸にしやがんでは
虫何故に情ない聲おしやるか
鹿の聲その昔古き都かな
客遊いて象潟をなし秋の雨
雁[illegible]れ　月の雁鳴いて[illegible]
丸窓に書を芭蕉　月夜かな
御内儀が噌味となりし新酒哉
豊年ぢや米の水ぢやと新酒かな
秋の水、鏡が浦と申しけり

篤志の女學生一名世話したし

一と通りの學校教育ありて殊に英語の素養あり　文學若しくは語學的傾向をもてる者にて將來婦人問題の爲め盡さんとする篤志の女[illegible]「世界婦人」に[illegible]て[illegible]世話したし事務及編輯を見習[illegible]つゝ、[illegible]を給す、衣食住其他必要[illegible]自分持の[illegible]事、但し[illegible]の方は右記宛自身[illegible]履歴書添へ申しこまれたし、手紙は成るべく英語にて認められたし。

Kiichi Kaneko, Girard Kansas, U. S. A.

パンの略取

クロポトキン著△石川三四郎譯　一部金六錢 [illegible]

是れ世界婦人第廿五號全部を占めたるその命何故に本あれば新な諸君の傳道用に御配布せられんとを希望する所以也　クロポトキンは無政府共産主義の大成者にして本書は即ち其主義を最も痛切に議論せる大著作なり　加ふるに全號にはクロポトキンが自叙傳によりて其曲折波瀾多き大偉人の生涯を序しあれば一讀して此大主義を知り得ると同時に偉人の事蹟を學ぶてとを得べし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

海外時事

●土耳古婦人の自由

土耳古の革命事業が着々歩を進めつゝあるとは世の既に知る所であるが、此革命によりて全國婦人が果して男子と同じく自由を得るであらうか、とは吾等の先づ心に懐く質問である。

此頃、サロニカなる公開劇場に於ては、青年黨の運動費を寄附せんが爲に興味ある芝居が催された、外題は「叫び」といふ革命劇である、此劇の著者カメル、ベイは非常なる熱誠を以て之を書いたといふ事であるが、未だ自由革命の來らざるに早く死んで了つた、當時代には彼の著作は多く禁止されて、此「叫び」なぞは之を所持したゞけでも重い刑罰に處せらるゝ次第であつた、而も、今ではヒルミ、パシャの如き偉大貴族を始め、有ゆる有識者の前にて何の憚り無く演ぜられ、觀客は其最も革命的な点、殊に探偵醜穴の處なぞを非常に喝采した、但し此場内に果して婦人が入て居たかドウか若し居たならば、從來閨房の内に閉込められた婦人の境遇に一大變化を來したといふべきである、芝居其もの、方には自由獨立なる女子の主人公、土耳古婦人も居る、其主人公はアルバニアの男子が如き服裝を爲して熱心に祖國の爲に奮闘するノである、此役を演じたものは實にアルメニアの紳商の一少女であつた

土耳古婦人の閨房開放の事は内外より希望する所であらう、今より二世紀程以前にメリー、モンターグと云ふ婦人はコンスタンチノープルの諸家の閨房に入り込みて、西歐婦人の生活を說ける小說杯を傳へ、土耳古婦人を精神的に壓殺する所の貴文學を斥けた、其より一世紀の後ヘリエツト、マルチノーは、カイロ及びダマスカスに於けるモハメダン閨房生活の破壞されつゝあるを認めた、爾來英國及び米國の婦人、殊に女醫は非常なる熱心を以て歡迎せられ、而して漸く教育されたる土耳古婦人は其家庭の敎育上の點に對して反抗の聲を高めて來た、其論文は往々多く著はれた、ピエル、ロチといふ人は此問題に筆を執りたると同時に婦人脫逃の悲劇の著者として令名がある、いるに今や、「青年黨」が歷史の舞臺に現はるゝに至り、多數の婦人は覆面をも取り却て婦々として敢て市街を歩行する樣になつた、但し歷史はいつも逆戻を繰返すのである、土耳古の自由が果して婦人にも平等に分たるゝや否やは尚ほ未來の問題に屬する。

●墺國社會民主々義　婦人大會

墺太利婦人社會々義者は第三回の大會を開いた、其最初の大會を開いたのは既に十年前の事であるが、其時は獨逸語地方の婦人の集會であつた、何時の大會も皆成功して來た、其何回の演說は墺太利勞働婦人中に革命的思想の發達しつゝあることを證明する

墺國社會民主々義婦人の運動は其性質勞働組合運動なると同時に社會主義運動である、彼等の活動は常に墺國一般の勞働運動と關係的に婦人勞働者の團結を助けて居るが、而も之と同時に、彼等をして社會主義者たらしめ、階級的自覺ある平民婦人たらしめ、彼等の階級的自由の爲に戰はしめんとを目的として居る、彼等の事業は決して單純なる勞働組合に屬するものでは無い。彼等は普通選擧の爲に戰つて居る、而して其戰びを利用して婦人の同志を誘說し、單に勞働婦人のみならず、勞働者の妻君連をも集めて、婦人の政治的訓練を造り、以て傳道運動の中心たらしめんとして居る。

其第一回大會には四千人の團結員あり、「勞働婦人新聞」は二千五百の讀者を有して居た、一九〇三年の第二回大會の時には婦人勞働組合員の數が一萬一千人となり、「勞働婦人新聞」の讀者は三千五百となつた更に第三回大會に於ける報告によれば、婦人勞働組合の團体員數が五萬で、「勞働婦人新聞」の讀者は一萬二千四百の多きに達した、而も社會の結果として此外に政治團體内に於て一四千百七十五名の婦人あるを發見した、其中千二百二十七名は昨年十一月以來長足の進步をなせる所謂「自由政治婦人團体」に屬するのである。

同志ポップ氏は其開會の辭に於て、婦人の爲に特別なる組織を創立するに婦人を社會黨より分離するに非ずして、彼等をして社會黨の生命に一層強固に結合せしむるの手段であると強調した、其理由とする所は政治的時代より婦人を排斥する所の保守的なる集會結社法あり、且つ女性の天然と境遇とに特殊の點多きが爲に自ら特殊の機關を要すと謂ふにあり。

婦人選擧權の問題は特に熱心に發行して論ぜられ、全婦人に全參政權を與へよとの特殊なる煽動を爲すべき事を同志に迫つた。

之に次で、婦人勞働者、殊に小兒を持てる母親、洗濯女、保護の特別なる法規の必要に就て討議した、そして現在の資本家制度に對して猛烈なる攻擊があつた、次に與黨の機關紙に就て評議したが、現在の婦人の機關、「勞働婦人新聞」に修正を加ふるを暗示せられた。

同大會は二年每に墺國獨逸語地方社會主義者と一致して開催するとに定まつた。

●死刑と露國文學

一國民の歷史は其文學に映ずるものである、此事は露國に於て死刑の宣告と執行との增加が同國の詩人と著作家とに強き印象を與へたといふ事實に依て證明される、其最初に著はされしはレオニド、アンドレーフの「絞殺されたる七人の話」てふ恐ろしい事實で、次はアヌツヒンの有名なる「ヤコブ、ステプリアンスキーの死刑」といふのである、最後の作物はレオニド、セメノフが「死刑」と稱する小說である、トルストイは此書の序に於て、此書が「其強固なる簡潔と其修辭の力とに於て卓越せると」を記して居る、そして此書がドウか此殺害を殺滅するの案内となる樣にと言ふ希望を陳べて居る、トルストイ自身も自分の「予は默する能はず」を以て滿足することが出來ないで、目下死刑反對の一著作に筆を執て居る、其書名は「力の法律と愛の法律」と言ふのだそうな。

●英國婦人勞働組合大會

ノツチンハムのヴイクトリア、ステーションホテルに開かれたる「婦人勞働組合同盟」の例年大會は頗る盛大であつた、勞働組合は各種の職業の婦人間に發達しつゝある。

大會に於て、レヤツクレトン氏は議長として席に着き、同盟の根氣強き書記たるメリー、マカーサー嬢は、一年間の大進步を報告した、現今の總組合員は十万爲人と稱する、同盟の地方勞働部は大に發達して毀傷婦人の賠償要求に關して多人の貢献を致した、又、同時に、婦人勞働者の爲にせる種々なるストライキに干涉して成効した。

サーカス町會館に於ける夜の會合は非常なる來會者ありて、爲に場外に溢れたる者は別に集會せる程であつた、シアツクレトン氏は再び議長席に着き、メリー、マコーサー嬢（婦人勞働組合近時の成効は多く同嬢の努力に負ふ）クルック代議士、デアートリユード、トリツクエル及びヘミルトン、レイネス附正等之を扶けた、數個の新說は非常なる熱を以て紹介けられ、喝采は屢々起つた、最後に全婦人勞働者をして、勞働組合員たらしむべしとの決議は全會一致を以て通過した。

●獨逸婦人の勝利

獨逸婦人は其高等教育權の爲に久しく戰へるが、今や漸く勝利を得るに至つた、即ち文部大臣は、「獨逸帝國の臣民たる婦人」は男子と同等の條件を以て大學に入ることを許す旨の省令を發布した、但し外國婦人にして大學に入らんとする者は先づ文部大臣の許可を受くべしとの規定は露國婦人に對して大恐慌を來した、蓋し彼等は自國に於ては到底高等教育を受くるの希望を有せんのである。

●モリス紀念祭

英國社會民主黨ハンマースミス支部にては、十月三日、ハンマースミス町會館に於てウヰリアム、モリス逝去を紀念せんが爲に大示威運動を行ふ筈である、全日全所にはモリスの作物を陳列し、モリスの個人的知友は此處に出席して演說したる筈である。

●英國女中團体

多數の女中はバーミンヘムに於て會合を開き、團結組織を造るに決した、そして一の決議を爲して、彼等の境遇を改善する唯一の道は團結であることを宣言し、又、彼等は「婦人勞働者全國聯合」に加盟し、其分派として女中の團體を成すことを決定した。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

高き月謝 廉つぱき人格

小野吉勝

（一）

予に友ありき、彼れ或は予と交るに方便の爲めにせしならむ。さはれ予は彼が教育あり事に熱心なるを認め畏友とし友道の誠を盡して交りたりき。然るに不幸、予は予の眼識の不明なりしを慨悔せざるの已むを得ざるを悲む。

事は意外の方面より瓦解し崩壞し來りぬ何ぞや、他なし金錢問題に對する彼が不信用の一事是れ、予は實に彼が人格の何ものにも代ふべからざる、一汚點の貽されたるを惜しむ歎くもの、殊に友少き予には殊更にこの悲歎の念の切なるを覺ゆる也。

（二）

昨年の暮なりき、彼、予に請ふに二十金の貸與を以てす、予素より一介の書生、私かに天下の漂浪兒を以て任ず、日々の生活にすら餘裕なき身の上、いかで大枚二十金の遊金あらむや。予一度は之を謝絶せしかど、其口實のいかにも男らしさにつひ釣り込まれ——いかにお坊ちやまなりし——翌日を約して別る。予其夜東奔西走やうやく他より借用し來り、直に一電を飛ばして安堵せしむ。彼の面目或は保維せられしなるべし。

然るに茲に怪むべきは、期日來れども言を左右に托して返濟に應せず、後の日を期す。又約に違ふ、予の債主よりは督促急なり。馬鹿正直にして而かも微力なる予は進退こゝに窮まり、即ち百拜の後やつと又他より借用の光榮を得——いかに馬鹿馬鹿しかりしよ——之を初の債主に濟す——こゝにも予にとりては侮辱にも等しき不面目を蒙りたることありき。

（三）

爾來月を閲すること九又十、短しとせず而して彼が同一行爲は予一人に對してのみならず、其師なると友なるとを將又一面識なるとを問はず到る所に其惡辣の手を伸ばせしもの、試し、一例を示せば、或未見の人より予に對して彼が辨濟の調停方を依賴し來りたることあり——、予と彼との如何にも親密げに交れるを見たればなるべし——予不肖と雖、座視するに忍びず、即ち起つて同情者の爲に謀る。彼又予の好意を諒して一時の取得金全部——借用金の半額——を予に托せらる。予大に喜び馳せて其債權者の門を叩く。一見舊知の如きあり、寔に温厚の君子人なり。予は友が家計の不如意の實情を細叙して半金の納據を請ふ。其人又予の好意を諒して快諾せらる。予、思はず涙目を伏して歸る。

翌月殘りの半金の辨濟せらるべき筈也。而かも月は超えぬ、月は過ぎ去らむとせり。而かも友は其取得の全部を掠め去つて、いづれ後日直接に債主に返濟すべしとか、斷を予に刎返し來れるあるのみ。予の面目、踏みつぶされし上にも踏みつぶされし予の面目。

予、世に起つて能く爲すなしと雖、若き脈搏には熱血の循流するあり。この上は調停の勢を取るも辭なし、潔く手を退くに如かずと覺悟し、之を兩者に通ず。債主は飽くまでも温厚寛仁なる君子人なり、予に齎すを返して曰く『よし、この上彼を追及せばとて徒勢ならむ。凡て逝きて歸らぬ江戸川に流し申さむ。唯惜むらくは有望なる彼の前途の闇黒ならむことを』と。娓々數千語その宏量なること、この一節に盡く。予、其心のうれしさ男らしさに思はず涙を構へたりき。

而して予は其後彼に對して何等の督促をなしたることなし。彼れ自ら遠ざかりてまた來らず。

（四）

予を目して猥りに友の不徳をあばくものとなす勿れ、而して又友の私事を醜陋視するものとなす勿れ。一人の友を得る、豈に容易の事ならむや。友少き予にとりて其一をすら失ふが如きは堪へがたき寂寞なれば也、寧ろ苦痛なれば也。

彼が到る所に爲せる不義理の情誼も、畢竟之れ現社會制度より生ずる生活難の窮迫に追はれ追はれたるもの其一主因ならざらむや、教育ある事に熱心なる有爲の彼をして斯の如き不始末に陥れたるもの生活難てふ社會の罪也、罪ならざらむや。

さはれ誤解する勿れ、予は彼の不始末を單に社會制度の罪のみに歸するものにあらざることを、至誠にして成らざる事なし。男子須らく生活難と戰ひつゝ其節操を守り其品格を保ち、茲に人生の面目は昭光の如く輝き出でむ。

予の如き無智薄信の徒、生活難に悩む素より其所なり、朝に衣食の事を思ひ煩ひ、夕に其流寓に惑ふ。

（五）

予に借財多し、之れまた右生活難より來りしその一。而かも債主は友なり又身内なり予が生活に幾分の餘裕あるを待つの宏量と寛仁とを有し、快く予をして其思ふ所を行はしむ。予交々慚愧と感謝との念ひに其日其日を惡戰苦闘せるなり。而かも幸に予は不義の情誼に人格の安賣を斷じて爲さゞらむことを努めつゝあり。非乎。

予が彼の友に拂ひし月謝や、其得たる苦き失敗の經驗に對する報酬なりとすれば或は安價ならむ。さはれ無宿の漂浪兒にとりては甚だ高き月謝にはあらざりしか。唯惜むらくは之れがために友の人格の漸降りに降りて、この一點より見て復た浮ぶ瀬もなき奈落の底に陥ぜしむこと是れ也。若しさらば彼が人格の價値は如何にも廉つぱき哉。

（六）

金錢問題を輕忽に附する勿れ、之れによりて世上如何に多くの親友が絶交せざるべからざるの悲境に陥りしよ、陥りつゝあるよ。慎むべきは金錢貸借問題なるかな。予が平素金錢に對しての無頓着は恐らくは予が生計跌蹉の石ならむ、省るべき也。予は苦き苦き經驗よりして之を絶叫す、せざる能はざるの餘儀なきに至る、豈に他意あらむや。

あはれ恐るべき生活難よ。

噫、前途を望めば雲漠々。予が東都に笈を負つて起つべき秋や何日?。寂しき侘ましき生涯に老いませる母の壽命やよく何時までぞ。嗟又吁。

個人消息

△西川文子氏　岐阜縣外野村なる實兄志知善友氏方にありて靜養中、去月十日めでたく女子分娩の由

△原子基氏　盛岡にて運動中警察の毒手に落ち、不幸にして怖るべき赤痢に感染し避病院にて療養中

△幸德秋水氏　府下巣鴨村二千四十番地に轉居せり

△田中正造翁　谷中村救濟問題並びに利根治水問題の爲め去月上旬上京奮夜奔走中

△吳弱男女史　清國革命少女として同志間に有名なりし同氏は本年五月青山女學院英文科を卒業して故國に歸りしが目下蘇州景海女學堂に教鞭を執る

△森近運平氏　去月上京、幸德秋水氏方に寄寓す

△小田頼造氏　母堂病氣の爲め目下郷里周防に在り

△木下尚江氏　去々月高度の熱に冒されしが最早全快頗る元氣あり

△深尾韶氏　病氣餘り宜しからぬ由

△關谷龍十郎氏　普通選擧期成大會事件の爲め本月五日區裁判所にて判決ある筈

手紙片々

▲田中正造翁より　老朽は吾々此方の學派の奈何には余り頓着無く、只谷々各派の大々的御成功をば祈るものです、人として人格さへよければそれで結構、人格は最上位にありて各學説の上にあり、學説は人格の下にありて其人々能力の科目とし か見へません、けれども飛無學の私見は[illegible]しれませんから、コンナ學問上の何事に付ては、々諸氏の御示教を望ます、さふも諸學派先生もヤハリ彼の古人の大象を撫するかの感があるのです

▲原子基氏より（盛岡傳染病院）「世界婦人」遂に迫害の禍にかゝりし由、悲憤にたへず、小生も遂に盛岡署の手に落ち、八日の處分、三日間獄に在て赤痢病となり、永い永い間此病院に居ります、然し失望はしません、必ず世界人類の爲に正義の旗をふる時がありましやう、葉は落ち菊子飢に泣く秋、東都同志の群を聞きて涙は北上川の水より多く流るゝを覺えます

▲關谷龍十郎氏より（萬年町）　昨日普通選擧期成大會を開催すべく準備中、小僧供の口より其筋に知られ、[illegible]の師を鼻あしらひ、「無責任、無用意」に[illegible]致候、此事件にて四日芝區裁判所に出頭、ラツパ節事件と共に四十日[illegible]く候

▲森田命作氏より　傳聞する所に依れば貴誌先號不幸にし禁止の厄に遭はれ候由、誠に々々驚き入り申候、新聞紙條例の罪は之れ或は[illegible]や、頗る[illegible]かし〳〵偏に念じ居り[illegible]く其實質なるを悟めて非常に[illegible]し、も小生が貴誌の趣旨に[illegible]して不肖なれども其萬分一の御助勢にもと投稿仕り[illegible]作最初の檄のために遂に貴誌が官憲の忌諱に觸れたるなりと思いて小生は一層の驚愕に打たれ申し候

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

空裡光（三）

南無百南無十瞭人

離る可きは道に非ず

「道也者不レ可二須臾離一也、可レ離非レ道也」ー中庸
「誰か先づ彼に施へて其報を受けんや、そは萬物は彼より出で、彼に倚り、彼に歸れば也」ー羅馬書一一の三五六

（一）

世間で言ふ道には種々の道がある。汽車の走る道は鐵道で、用水を引く道が水道だ。茶をたてる道は茶道といひ、花を生ける道を花道といふ、其他劍道の、柔道の、武士道のといふて仲々數へ限れたものでは無い。然るに、此の如く數限りの無い多くの道を『須臾も離るべからず』と言て悉く我一身に會得し遵守して行うとしたら其こそ大變なことではあるまいか。辯慶の七ッ道具でも、千手觀音でも此千差萬別の道を一々通り貫けるといふ事は到底不可能であろう、然るに『離るべきは道に非ざる也』と中庸にある。吾々が汽車に乘て走る時は、水道に離れる、惡道を歩む時は善道に離れる、正道を行く者は邪道に離れる。して見ると此の如き道は本來の眞の道とは言へないのだ、成る程、老子も『道の道とす可きは常の道に非ず』と言ふて居る。天眞の道は決して世間の所謂善道の惡道の正道の邪道のと稱する類では無い。是等の多くの道は所謂『常の道』である然らば離る可らざる道とは抑も如何なる道であろうか、道は果して離るべからざる者であろうか。

『二』

中庸には『天の命、之を性と謂ふ、性に率ふ、之を道と謂ふ』とある。其『天』とは陽明の所謂『天地鬼神の主宰』たる我的靈明の所在を指したのであろう。而して萬物は此靈明の發用であつて、其發用が天命によりて定まる所、即ち是れ『性』といふもの而して其性の趣く所、即ち是道である。果して然らば、其道とは萬物各々の天眞の性の趣く所、を指したのである。コウ言ふと道は多數の枝を生じて千差萬別のものなる如く思はれるが、併し、是れ恰も、水面に起る所の波浪が其形狀種々雜多なれども、皆同一の水の浮動である。と同樣なものである。而して水の浮動以外に『波』といふものゝ無きが如く、天性の歸趣即ち『道』を離れては、人間も、獸類も、鳥も、魚も、生物も、無生物も、萬の物は皆自ら存在することが出來ないのである。故に此道は吾々が自ら選ぶ所のもので無い天の命によりて定まる道なのだ『即ち、誰か先づ彼に施へて其報を受けんや、そは萬物は彼より出で、彼に倚り、彼に歸れば也』と言ふ所以である。

『三』

然るに人が惡道、邪道に進み行くといふは、抑も如何なる次第であろうか、是は前にも揭げたる『あやまりに影を我ぞと思ひその誠のすがたわすれはてぬる』といふ無住の歌によりて能く解かれるであろう。物體が光明に照される時は必ず其陰が出來る。人間の物慾にも亦陰が射すのである。人間本來の靈光が吾等の衷に輝やいて居る所へ物慾が起きて來ると、其物慾に陰が射すのである。恰も月夜の松陰の如きものである。然るに吾等は自らの物慾其ものと物慾の陰とを分明に識別する事が出來ないで、到頭其影までを本來の慾望其ものと合點する樣になるのだ。そして或は食い過ぎて胃を傷め、或は飮み過ぎて頭腦を傷け、或は色に溺れて家則を紊亂し、或は名に迷ふて自己の使命を忘却するといふ始末になる。基督教で『罪』と言ふのも、佛敎で『迷』と言ふのも、皆此『陰』に囚はれた事を指すのではあるまいか。

然るに、世の物質主義者は往々其陰までを本來の物慾として之を滿足するとに贊同するのである。是れ彼等が物質實在の原理より其發動たる物慾を人間の本情となし而して未だ『物慾其もの』と『物慾の陰』との差別を知らざる爲めに、總てを物慾と認むるより起る所の誤謬である。

之に反して、世の精神主義者は、往々にして人間本來の感情たる物慾其ものをも之を『罪』なりとして斥くるのである。是も亦物質主義者と同原因よりして此の如き誤謬に陷つたのである。即ち彼等は『物慾其もの』と『物慾の陰』との區別を知らぬ爲め、而して『物慾の陰』の恐ろしき弊毒を憎むの餘り、遂に本來の物慾其もの迄も罪惡なりと誤認する樣になつたのである。

『四』

食ふ、飮む、戀ふ、見る、聞く、等の物慾は皆な是れ人類天眞の感情である。予の假りに名けたる虛無の靈光の發用である。されば此靈光ありて始めて物慾あり、物慾ありて始めて物慾の陰ありと言ふべきものだ。約言すれば、靈光ありて始めて、物慾の陰があるのだ。然るに其陰は人間の本情にして心靈の翼たる——人間が之に依て活き之に依て動く處——の『物慾』の陰なのである。從て人自ら之に囚はるゝも亦强ち無理では無い。

併し、此『陰』ほど恐ろしいものは無い。一旦我等の心靈が物質の翼を得て動くや、同時に此『陰』が出來る、而して物慾は天眞の物慾其のものを滿足するに止まらずして我が『陰』を追及し初めるのである。處が其『陰』は物慾其もの、陰である。故に追へども〳〵果しが無い。恰も人が自己の影を追ふて走る樣なもので、人益々速かに追へば影は愈々急に走る。人遂に絕息して止むとも『陰』は到底捕へられない。猿猴が池中の月影を捕へんが爲めに遂に水中に溺るゝと云ふも是と同じ例である。世に修身、道德といふもののあるも之を防止せんが爲である。人間が一身を誤るも此『陰』である、一家を亂るも一國を危くするも皆唯だ此『陰』である。光は暗に照り、暗は之を曉らざりきとヨハネが言へるも之に外ならす。あゝ恐るべきは是れ此『陰』なる哉。

『五』

然るに吾等が衷に心靈の光あり、而して其裏として物慾の動くあり。從て此『陰』も亦到底吾等の心裡に必在の現象とするならば、吾等はドウしたら宜しいのであるか、此には種々なる方便があろうか予は內觀自省、常に我虛無裡に輝く所の靈光に對面することを習ふが最も能き方便と思ふ。光明に對する時には決して『陰』は見えない。『陰』の見ゆるのは必ず光明を脊にした時なのである。斯くて吾等の心眼が光明に充つる時はチヨト振り返つて其『陰』を見ても其『陰と本形』とを鮮明に區別するとが出來る。其狀態恰も孔子の『四十而不惑』といふ所であろう。而して此修養が益々進んで來た時に、物慾は常に靈光の直下を去らず。靈光は常に物慾の上に照らし。恰も人が太陽の直下に立つ如く『陰』といふものは殆ど見えなくなるであろう。所謂『從心所欲而不踰矩』とは即ち此邊のとを指したのであろう。パウロが『我生くるに非ず。キリスト我に在りて生くる也』と言へるも此境涯なるべし。

『六』

さて以上の如く解釋し來れば、世間で稱へる、善も、惡も、正道も、邪道も、罪も、迷も、悟も救も、皆同一なる虛無の大道に現はれし、靈光の發動に過ぎぬ。吾も人も禽獸草木も、生も、無生も、皆悉く此大道を通行する靈光の作用なりとすれば、此等一切の物が、造次にも顚沛にも、此道より離るゝとの出來ないのは當然である。然るに恰も離れたる如く思ふのは、我を見ずして我が幻影を見るからの事である。

あゝ道は然かく無邊無對高大なり、『仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後』とは是れ實に此大道を行く大靈の德に對する讃歎の語と稱ふべきである。此大靈の名は即ち『神』と言ふ。

友の返しに

孤舟

行き交ふ人も　うなだれつ
草木も萎む　夏の空
永き日足の　夕映の
光も深く　力なく

西方に沒せば　一輪の
明皎々と　清鏡の
玉兎美はし　東峰に
顔しるく　眞一文字

石もあらはに　歎ふべきか
金波銀波の　燦として
水に薫ずる　欄欄に
慰れて泣きし　人やたれ

靑春希望に　憧がるゝ
未來の理想を　夢みつゝ
俱に語りし　人や今

隙行く駒の　足早く
地軸轉廻　二乾坤
蘆の下葉の　運命かや
落ちては散りつゝ　今いづこ

互ひに戀ふる　悲しさよ
東に西に　將たいづち
假令今いかに　彷徨ふも

いづれ理想の　海に入る
木の葉をくゝる　チヨロチヨロも
自然の大勢に　畑擧げむ
蹂躙られし　名無草

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

筑波紀行

渡邊　間

出發

紫匂ふ波山に、登り見んと、友の發議に余も同意して、茲に同志三名、九月七日午前二時半發足す。天上の花、靜かに笑ひ、草間の虫絶えず歌ふ、旅の首途のさても快なることよ。

美しき雲

下妻街路を東へ、逆井山村に到れば、鷄鳴勇ましく、民家に起りて東天紅を告ぐ。げに紅なせる東の空よ、美しきかな雲の色紫紺二様の色を取交せて、その上に紅の一色を點せしが如き、その色、余は讃美歌をうたひつゝ急ぐ。

平塚より下妻へ

中途雜觀。腕車を駆る花嫁花聟、草刈乙女の鄙歌。制帽を阿彌陀に冠りし小學校教員渡錢を誤魔化す老船頭、旅は興あるものよと友の一人は語る。

午前八時下妻町着、行程六里、則ち茶店に休ふて渇を癒しつゝ、名物で御座いますとの餅を購ふて頬張る。

涼しき雨

筑波郡高道祖村を過ぎて、約一里、紫の山は前一歩、眼前に迫り來る、ふわ〳〵とせる白雲の、煙の如く、長く尾を曳いて、山頂に覆みしと見る間に、白雨頭上に落ち來れり。

涼しき雨よ、銀の如き雨よ、三人相顧みて嬉々と笑ひ、驟雨の清涼に、衣の濕ふも意とせざりき。

前途尚は遠し

山は益々眼前に迫る。今一息にて山麓に到る可しと、勇を鼓して歩を移せど、さても遠き山の麓よ、行けど辿れど、山は尚ほ遙かの前途にあり、呆れて道程を問へば、左様まだ二里の餘はあります、と答ふ。

若き三個の旅客はあつと驚きつ、再び、円く見めく、砂利道を辿る。

途に迷ふ

午後零時漸く山麓に達す。休みもせず、憩ひもせず、余等は最後の勇を振ふて、山頂へと突進す。

鋪石したる巷路は、一條の坂をなし、登山に便にす、余等は其上を踏みつゝ登り行くも、されども案内なき旅客は遂に山の半腹に於て、途ならぬ途に迷ふ、仕舞つたりと謂ひしも、巳に後の祭り、見よ矢は勢ひ好く弦を放れたるにあらずや、余等は到底登らざる可らずと、唯二無二に細き石道の凹凸を辿り初めたり。

復活の水

荊棘右左に繁り、磊々たる石、前後に横はり、進退危險なる山道を、余等は蛇の如く一個の洋傘を力に、腹這ひになりて攀じ登る、吹く風は生温たく、松間を洩る光線の暑さよ、疲勞困憊、危ふく失神せんとせし際、あゝ嬉しきかな、谷間を流れ出ずる、淺々たる泉、馳せ寄りて、吾先にと掬ひし時の水の味よ、肌打寛ぎて心行くまゝに涼を執りし時の思よ。

渓は烈しく岩を打ち、石に碎け、皷々として山腹を流れ下る。

あゝ是、活ける水よ、復活の泉よ、あゝ感謝すべきかな、この水、爾の前に渴なく疲れなし、あゝ希くは爾よ、永久に盡きせぬ流れあれ。

道は極まれり

活ける水の味に蘇りし、余等は、尚ほも形計りの道を踏分け擦分けつゝ登る、されどその凹凸なる道も遂に極まれり、余等は下る可きか、將亦道なき道を上る可きか如何にせんと、暫時石に腰しつゝ、携へたる梨子を喰りつゝ、三個の登山客は相互に思案せり、下山の登山に比して、決して容易にあらざるを思ふの余は、一人軟說を主張して、悠々廣濶なる眺望を擅まゝにす。

山腹の筑波町は點々脚下に横はり、疲れし足を滌せし小川の流は、白く帶の如く、今經來りし村々の人家、さては田畑の靑き、中に樺色なせるは大豆類の熟りたるなる可し、利根の流れは見えず、雲を吸いつゝこの光景に對す、わが心限りなく快を覺ゆ、友はと顧みれば、道なき路を辿りて遙かに身を、頂上の草叢に埋めて立つを見る。

杣道でせう

到底も駄目だと謂ひつゝ、還り來りし兩友と倶になり、下山の途に就く。

午後四時、山腹の旅館大鹽屋に脚絆の紐を解く、夕飯の時、給仕に侍りし女中に、登山の道は何れかと問ひければ、それは杣道でせう、お山への道は、この大通りですと、失敗も玆に至つては寧ろ滑稽也。

旅館の一夜

宵の中より、早く床の人となる、閑窗を洩れ出ずる水の音に、筑波おろし、怪しく耳に入つて眠られぬに、搗て加へて、室一個隔てし彼方の坐敷の騒々敷さ、歌うたふあり、駄辨を弄するあり、酒汲むあり、是皆救への權執る人々とか、若々敷事也。

今宵月なし、方に是れ外は闇なり、あゝ人の心も闇たらざるを得ず、思へ、數軒の貸坐敷、軒を聯ねて山腹にあるを、わが夢成らずして哀思切に動く。

友の登山

翌朝午前六時、友なる二人は男體、女體を見んと登山す、余は孤獨り旅館に居殘る。

さらば筑波よ

友の還りを待合せて、午前十一時、皈途に就く。

さらば筑波よ、紫の衣被きて立てる爾よ、爾の名嶽は今彩を賊ひ、爾の光榮は爾をして俗化せしむ。

悲しきかな人の子、彼等は爾の形態を知らずして、爾の影を拾ふ、されど記せよ、爾を俗化し、爾を亡ぼすものは、爾の前に小さき者たる也、あゝ大なるかな爾よ、爾は無窮に生き、無限に活き、永久にその紫の衣を脫がざる可し。

余は今爾に別を告げん、さらば筑波よ。

歸宅

八日午後九時、辛くも吾家に辿り着く。足の塵を拂ふて浴を取り、思懸けなき菱蕃の馳走に舌鼓を打つ。興ある旅の還りよ。

床を延べて、雨戸を繰れば、星光、燦として吾心を射る。(九月九日稿)

雲

小野有香

一

凝りては峨々たる巖を現じ
崩れて飄々綿と飛び散る
奔湍ながれて千里の銀河
洋々たゝへて春の海原

二

或は駱駝の奇峯と變じ
或は孔雀の尾羽とたなびく
猛きかざりの獅子の勢
腹こそよるなれ般若の面相

三

時には海ゆく舟人擧り
陸こそ見ゆれとうちまどはしめ
時には夕映稚兒のうたの
「夕映小やけ」はいと華やかに

四

天地いかれば凄き墨汁ながし
常闇りては佞人震ひ
秋の日晴れては影だにいづこ
空翔ふ鳥にやいだかれたらし

五

實に世に奇しきは雲のすがたぞ
あるかと見やれば忽ち散じ
散じて消えてはまたたくひまに
み空にはびこる變怪のかたち

六

夕はたそや小窓に倚りて
行く雲ながめて遠人おもひ
朝は將軍天幕の外に
黑雲みつめて何はくそゑむ

七

實に實に雲こそ我らの慰藉
なやめるものには思ひを寄させ
よろこぶものにはほゝゑみ譽るゝ
すがたは變れど變らぬなさけ

八

人こそおぞます法律に義理に
締められたる地上の囚因
雲こそ戀しき思ひのまゝに
みそらを驅けりてみそらに憩ふ

九

悠々せまらず五彩の雲に
天馳使の來迎しのび
風伯狂へば今實覺れて
バルカン半島志士をぞおもふ

秋十句

可笑

便待つ故郷の空や渡鳥
百萬の敵も一矢の案山子哉
乞食は菰の上にて月見かな
白菊に歌を詠みたる下柄哉
菊咲て殿は舞子を召されけり
散らせて色あせにけり菊の花
掛茶屋に馬の嘶なく野分かな
新嫁御乳母の七草に貰ひけり
雁一群宵に紛の如く見えにけり
蜻蛉やまだ [illegible]

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小說 **放浪**

八の下

ゴーリキイ著　尾…生譯

吾等は雨宿りする所もない、全く暗くなつて草のザワ〳〵鳴る音は、何かを嚇すやうに聞え、雷は鳴り、雲は裂けて黄金色、の火の舌に彩られ、銀色の連山は瞬に消えて再び暗くなつた、厚い雨は大河のやうに降り、雷鳴は絶えず荒野の空を轉回り、草は風と雨に鞭打たれ、て地に伏し、弱い聲でザワ〳〵鳴つて、萬物は戰慄してゐた、電光は目を眩ましながら雲を引裂き、青色の光は遠く彼方に火の連山を現し、淡い色の火は、骨のやうな銀色に照つたが、電光が消ゆると同時に、彼も暗黑の間に沈むやうに失せて了ふ、音は歌で世界は寂莫になつた、天は怒つて地から起る塵芥や汚物を火で潔め、地も亦彼の怒りに戰慄した

シヤクローは震へ怖れた、犬のやうに鳴つたが、私には非常に勇氣を與へた、日頃にない感覺を高め、而して野原の壯嚴な、明瞭たる光景に注意した、不可思議な錯雜は堪へ難い程の——美であつた、心靈は勇猛な對稱に調を合せて、驚くべき舞踏な調和を生じた。

心に滿ちてゐる此の想ひ、雲を裂き、地を動す秘密多き力に接した、此の歡喜を外面に表したいと云ふ慾が、私の咽に湧起て來た、天に燃え立つ焔は、私の胸中にも燃えた、斯くして私は心の波を外面に露し得たか？、自然の演劇に接した生氣を顯し得たか？……………私は歌を始めた……聲高く、咽喉の破裂も怖れずに、雷は吼え電光は痙攣し、草は鳴り、私は歌ひ而して在ん限りの聲で調を和した………心から……他に誰もゐないので妨げられることなく、而して生氣と權威ある美と勢力とに歡迎せられて私は總ての秘密を會得し、慾望は滿されたやうに感じた、が美と勢力とは荒野を暴し、殆と野は大嵐で……私は自然の莊嚴な演劇を認ることが出來なかつた。

而して、自ら低う吟いた、如斯な行爲を誰も攪亂し、妨害せぬであらう亦私の行爲に對して嚴格な批評を加へぬであらうとを、私は堅く信ずる、突然強い動搖が私の足に捲き附いて已むを得ず泥水の中に陷つた：……シヤクローは憤怒の眼色で私の顏を睨み。

「殺し給へ、殺さぬか、何だ？、默つて與れ、叫ぶな！、咽喉を引裂くよ、解つたか」

私は狼狽した、而して何も邪魔にはならないだらうと問ふた……。

「邪魔になる、僕を惱すんぢやないか、雷鳴……神は話を爲、君は吼える………何を忘想へてゐるんだ」

歌つてゐたとや、私に面白いから、彼にも可厭ではない筈だ、と說明した。

「否、僕は大嫌ひだ」と敎るやうに云ふた

「ちや、休さうよ」底聲で云ふた。

「マウ、既う殺し給へ、今後も」とシヤクローは嚴格な要求をなした。

「否、汝は益々歌る意りだ……」

「マア、僕の言ふとを聽き給へ、君は何を考へてゐるんだ」とシヤクローは怒氣を啣んで始めた

「君は獨身者か？、家は無んか？、母は無んか？、父は無んか？、親類は無んか？、國は無んか？、此の世に何を有つてゐるんだ、君は人間？、解つたか？、僕は一個の人間だ！、僕は總ての物が屬してゐる………と彼は少時く默考へて。

「僕は侯爵だ！………而して君は………君は……何でもないだらう、全く何でもないは……………而して君は愚なとを云ふたとがある……私は……そ……それ！……之れ以上言へなかつたら、何でも可いから一所に行てカウタイスやチイフリスを見給へ！、………解つたか？、君？、僕に反對ふのは熄せ、何でも可いから僕の言ふ通りになつてそれば、損は無よ、可いやうに計らふ、決して心配することはない、何でも要物があつたら云ひ給へ、無論君から報酬を貰ふなんて考へはない、寧つて僕の方から報酬を拂ふのだ、それが爲に困るやうなとはない、少々のことに驚くやうな人間か？、亦兩人は特別の間柄だから他人行儀は厭やだ……………」

「ハヽハ、フフフ」

彼は舌鼓を打ち、鼻鼓を鳴し、太息を吐きながら長廣舌を振つた、私は默いて口を開いたまゝ彼の顏を凝視ると、兩人の長の旅路の、私に對する侮辱、不滿、怨恨の色が歷然かに彼の顏に現はれてゐた、彼は力んで指で私の胸を突き、肩を搖ぶり、脊の上に負さつた時、雨が降つて雷が鳴始めたのでシヤクローは大きな聲で怒鳴つた、而して私の境遇の悲劇は、瞭らかに平常のやうに意識にされて、笑はずにはゐられなかつた、大きな聲で哄笑つた、するとシヤクローは狼狽て私に脊を向けた。

九の上

チイフリスに近くに從て、シヤクローは益々地金を表はし、絶えず喃々不平を鳴すやうになつて、疲れてはゐるが然し不動の顏に、新な色を示した、ヴラヂイカヴカスに遠からぬ、チエルケツセンアウル（村）に來て、幸と玉蜀黍を收穫する職業を發見た

二日間此の村で働いたが、此村の人は殆と一言も露西亞語を話さないので、彼等の言語は唯だ兩人を嘲弄し、誹謗するに過ぎなかつた、已むを得す此村を立去るとに決心した時、吾等に對する村民の誹謗、嘲弄罵詈の聲が、火の手を擧げたには驚いた

兩人が村から凡そ十ヴエルスト行進して來た時、シヤクローは突然懷から簡のやうに卷いた物を出し、凱歌を奏ながら夫れを私に見せて叫んだ

「既う働く必要はない、これを賣つて何でも買ふ！、チイフリスに行くまでは、大丈夫！君解つたか？」

私はその包物を彼から掠奪つて傍へ投げて四方を見廻した、チエルケツス人は戲言とは思はない、必つと眞面目に探る、或日その哥薩克人に怨んな話を聞たとがあつた「或る放浪人、其の人は此の村で働いてゐたが彼が出發する時に、銀製の食匙を携帶したそこでチエルケツス人は彼の跡を追駈けて搜索したが果して持つてゐた、サア怒るの怒らないのつて、[illegible]腹を截割つて非常な怪我を負はせ、半死半生になつて[illegible]てゐる放浪人を、其儘の[illegible]に置去にして食匙を取つて悠々と去つて了つた恰度其時に通り合せた哥薩克人を見て、助けてゐる放浪人は泣きながら事件の顛末を精しく語つて、哥薩克陣營の道の上で死で了つた」この話をしては哥薩克人が幾度も吾等に警戒をして與れた、私は此の話の根據に一點の疑を挾む餘地がなかつた。

私が話を始めるとシヤクローも其の邪を何想して、私の前に起上り、恰度猫のやうに胸を露出し、眼を集め、視線を捻りながら默つて聽てゐた　兩人は五分間程互に呼吸を殺して胸と胸を鋒立てたが、シヤクローは突然視線を外して暴く叫んだ！」

「既う滿足だ。」

兩人は何かなく默に疲れた、シヤクローは、私の投げ捨た美しい包物の方を訴へるやうな顏色で覗き、而して再た始めた。

『何もさう爭ふとはない、ファアアア、フア！……寬迎な！、君、君の物を偸むだのぢやないよ！、君に迷惑を懸たか、君は僕に迷惑を懸るから偸むだんだ……僕は可厭だ……働くのが好なら働き給へ……何も爲たくない、僕が君を助ける……チエ、チエ、チエ、チエ！……………」

● 獄中消息

●●●●●赤[illegible]より（[illegible]監獄）

御端書有難う身[illegible]はもう快復したかい、僕は獄中至つて健全だ[illegible]本晴から晩まで縛られた[illegible]、君の[illegible]探し人る俳[illegible]る事、人間業で無いから致方無し[illegible]、分不[illegible]だらうね、コンナ時[illegible]の因縁を脱所に[illegible]獄中に[illegible]たる、何だか[illegible]する[illegible]此[illegible]の所[illegible]時[illegible]因縁[illegible]、無[illegible]四五日前から獨房[illegible]移された[illegible]は出來るが淋しい殊に雨[illegible]降る日などは天地間唯だ我れ一人也と云ふ孤獨の感がむら〳〵と湧くよ[illegible]なる科世[illegible]孤獨になる[illegible]が實際だね君見給へ、社會的[illegible]孤獨であつた者は無いぢやないか、[illegible]エラが云[illegible]進化の方則とか自い法を云つたつて人間の精神と行爲も離れて存在する譯では無いから我々は此等に無く信ずる所はどし〳〵行はねばならぬな、[illegible]が悔改めれば誰れでも神の國を見るを得べしと言つた樣に[illegible]が兄弟姉妹を本當に自分の社會的境遇を自覺すれば何時ぞや君[illegible]らでも理想的[illegible]形造られる[illegible]ら獄中の自然美論を聽かされた事があつたがコウ云ふ處に居て自然美を接する[illegible]る時には、一寸した空を見ても、自由に自然美合を見ても馬鹿に嬉しい、君[illegible]を貰せらる境遇に居れば左程有難くも無い、丁度富士の裾野の樵夫や田子の浦の漁師が富士の山光や田子の浦の水色を見て何とも思はぬと同じだ。凡、渴仰崇拜の情は自分の肉と心とが或る境遇或る權威に囚はれて居る時に起るものだ人間の肉と心とが解放されて自由になつた時は自然美も神の恩も我に於て何の權威も無い。何か面白い本があつたら貸して與れ給へ、アンドリユーカ、バツクスの「パツーコムミユン」が君の處にあつたと思ふ貸して與れ給へ。逸見君十日に上げた手紙が着きましたか、餘り議論が多かつたからドウかと思ふ。福田女史によろしく

（石川宛）

●●●●●●山川均君より（東京監獄）

每度御端難有う、御暇をだそうと思ても、背信の禁止やら新聞紙條例の方の判然鋼やらでツイ届かなかつた、レザレクシヨン擬作うで面白く讀んだ、殊に日本の牢に這入つてゐて日本の裁判を受けながらほんを讀むと[illegible]面白い、併しトルストイよりは我々の方が此と仕合せかも知れぬ、君も少しは疲れが直り升たか、福田姉によろしく（石川宛）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

露國社會主義史

石川旭山

▲緒言

十九世紀開幕より今日に至る露國の歴史は殆んど之を革命運動史と稱するを得べし、然れども其革命の理想は甚だ混沌たるものにして、單明ならず、從て社會主義の如きも早くより輸入せられたりと雖ども、其獨立の運動を開始するに至りしは十九世紀の末葉に在り、蓋し露國政府は尚ほ舊式の專制政治を固守して動かず、從て人民の自由の熱望は一に政府的自由の革命に傾倒せられて社會的經濟的革命に推及せられず社會主義は久しきの間、僅かに一般革命に附隨して唱導せられしに過ぎざりき、されば露國社會主義の歴史を知らんと欲せば吾人は先づ一般の革命運動を知らざる可らず然れども彼の久しきに亘れる、大運動を詳序するは本書紙數の限内に於て到底能くする所に非ず、且つ本書の主眼とする所に非ざれば、吾人は極めて簡單に一般の變遷を記述すべし。

▲革命の種子

抑も露國に於て革命的種子の播かれしは遙かに遡りてピエル大帝の時にありと言ふ可し、蓋し大帝は非常に急激なる改革を企圖せし人にして、彼が西歐の文明を自國内に布殖せんとするや、極めて嚴酷、壓制なる手段を施して顧みず、既に一種の革命を斷行せるものと言ふべかりき、所謂「上よりの革命」を斷行せしものなりき、然るに彼は種々なる革命を斷行せるに係はらず、其舊制度の根本たる絶對專制主義を改革せんとを欲せざりき、是れ甚だ偏跛なる改革にして、露國の政治組織の土臺は之より漸く動搖を初めたりと言ふべし、西歐諸國に自由主義の潮流を汎濫せしめし佛國革命は又た露國をして其餘流に接せしめき、次でナポレオンの寇入あるや、露國軍人をして西歐の地を旅行せしめて親しく其風物を觀察せしめたり、而して彼方をして其自由文明の美觀を欽慕するに至らしめたり、されば、一八二五年十二月、露國革命運動の先驅たる「デセムブリスト」陰謀は即ち露都に於ける軍隊内に起れるなりき、而して其目的とする所、亦た自由と憲法とを要求するに在りき、されど「デセムブリスト」の叛逆は失敗し、其首領の五人は死刑に處せられ、之に與せる百二十人の同志、鐵鎖に縛せられて西伯利亞に追放せられ、其他多くの通常兵は皆な[illegible]なる嚴刑を受くるに至りたり、是れ實に露國革命運動に最初の模範を示せしものにして、彼等の犧牲は決して無益に終らざりき、即ち之よりして、「神聖露西亞」の社會は漸く深く革命的精神を浸潤せしむるに至れり。

▲「自由！」の叫び、農奴解放

「自由」てふ一語は最初各個人の胸裏に響きし靜なる音調なりしも、思潮漸く進みて文學界の一勢力として顯はるゝに至れり而して政府亦た漸く之に注意し、西歐自由主義の危險なるとを警戒し初めたり、一八二六年即ち「デセムブリスト」の叛逆ありし翌年、早くも政府は言論出版を制束する嚴重なる法令を發し、政府の御用新聞以外は殆んど一切の新聞の發行を不可能ならしめたり、反動は却て激發したり、政府反對の聲、自由主義の叫びは漸く其勢を高め來りぬ、一八三五年無政府主義革命の父たるバクーニンが初めてモスコウに趣ける時、同地に於ては既に政府反對の團體を存せし程なりき、（バクーニン傳參照）イワン・セルジエビッチ・ツルグネフの如き、アレキサンデル・ヘルツエンの如き、即ち皆な自由主義を懷抱して同團體に在りしなり時漸く進んで革命の激潮は西歐先進國に瀰漫し來り、一八四八年の歐洲革命となりしが、革命爆發の餘波は遙かに隔てし東方專制國の人民の心靈に深くも響き渡りぬ、農奴の叛逆之より頻りなり、人心の動搖漸く怒濤の如くならんとす、更に一八五四年クリミヤ戰爭起りて動員令全國に及ぶや、人民の反抗增々甚だし、農奴解放は已む可らざるの形勢となりぬ、乃ち一八六一年二月十九日アレキサンデル二世は遂に農奴解放の敕令を發するに至れり、然れども其解放の敕令は夏の夜の夢の如く、之よりして人民の爲には更らに一大壓迫を齎らしぬ、盖し農奴解放によりて社會的經濟的大激變を現したるを以て也。

▲アレキサンデル、ヘルツエン

當時露國改革運動の指導者中最も有力なるは即ちアレキサンデル、ヘルツエンなりき、ヘルツエンは一八一二年モスコウに生る、彼は學校教育を經へて社會に出づるや、幾何ならずして其言論の爲にウイアツカ及びウラジミルに追放せらる、期滿ちて歸鄕するや、專ら身を文學に委ね、一八四二年には早くも世の注意を牽くに至れり、然るに同年警察を評論せし爲め再び轉住を命ぜられてノブゴロドに遷りぬ、一八四七年旅行の許可を得て倫敦に趣き、一八五一年同市に於て「自由新聞」を發刊して露國政府を攻擊せしが、露政府の禁止する所となり、更に一八五七年に至りて「警鐘」を發刊せり、其雜誌の露國に密輸入せられしと甚だ多く皇帝より農民に至るまで有ゆる階級の人々が皆之を讀いて我が心臟を激擊するなりき、一八六三年波蘭人の叛逆起るや、彼は之に助勢せんが爲に「警鐘」の發刊をゼネワに移し、一八七一年巴里に死去せし一年前まで同ゼネワ市に於て其發行を繼續したり。

ヘルツエンはモスコウ生活以來バクーニン等と共にヘーゲルを讀み青年ヘーゲル黨に近き、フオイエルバツハの人道主義を學び、而して革命家となり、社會主義者となりしが、晩年に及びては革命的方針を變じて一箇の政治家となれり、彼は死去の少しく以前、舊友バクーニンに送れる書中に曰く「君も僕も、嘗て自己の確信に背かざりき、然れども今や互に意見の相違せるを見る、君は從前の如く、破壞の熱望を以て前方に突進す…………、君は行ゆる障碍を壓壞す、君は唯だ將來に對してのみ歴史を正さんとす、然るに余は之に反す、余は將來の革命手段に就て信念を有せず、余は如何にして人民を相共に進歩せしむべきかを知らんが爲に、彼等の進行の過去現在を調査せんと欲す、而も君の如く彼等を離れて前進すると無し、盖し君の如くせば彼等は余に隨進せざる可ければ也、…余に隨進すると能はざる可ければ也」と。

▲萬國勞働協會、皇帝狙擊

先是、一八六三年萬國勞働協會の創立せらるゝあり、將來の世界的革命運動は盖し此團体より起らんとするの光景を呈せり、當時西伯利亞の配所を脫して西歐の中央舞臺に再び獅子の如く躍り出でたるバクーニンは、一八六五年其青年同志ネッチアイエフを祖國モスコウに送り、萬國勞働協會支部てふ名稱の下に秘密革命結社を創立せしめたり、一八六六年同團体の一員にしてカラコゾフと稱する勞働者が皇帝狙擊の椿事は露國の上下の人心を震駭し、恰も將來に於ける天下の大亂を報ずるの信號となれり、政府はカラコゾフ及び其同志を正式裁判に附せずして殘酷なる刑罰に問へり是れよりして政府の警戒愈々嚴に、特に彼の有名なる「第三課」と稱する秘密警察は漸く顯著なる活動を爲すに至れり。

▲虛無黨

當時露國に於ける自由主義者を總稱して之を「虛無黨」と言ふ其名稱はツルゲネフの著「父と子」てふ小說より起れり、其言意とする所蓋し一切の權威を否認し、百般の事物を理性の批評に照らして判斷せんとするに在り、彼等の運動は其初め政府的に非ず革命的に非ずして、道德的、宗教的、教育的運動なりき、然れども彼等の沈痛なる、堅忍なる、此の運動こそ、實に後來の一大革命を起すべき深き〳〵源泉を造れるものなりけれ。

▲青年男女の動搖

彼等は多く新智識を有する青年男女なりき、彼等の思想、彼等の行動は、漸く其政府及び家庭と衝突するに至れり、殊に其思想の政府と家庭が女子の自由を嫌惡せると甚しく、其壓制の結果は甚だ悲慘なる狀態をすら生するに至りき、政府が女子をして高等の學校に入學するを許さゞるは彼等青年女子の殊に深く憤慨する所にして、彼等は之が認許を得んが爲に決死の運動を起し遂に大學教授の私講義に出席するの權利を與へられぬ、又た次で外國大學に入學せんが爲に單獨にて旅行するの許可を得たり、此の如き事態は、是れ實に當時の青年男女が、如何に熱心に新智識を渴望し居りしかを表顯するものにして、且つ彼等が之より陸續として獨逸、佛蘭西、殊に瑞西に向て出發するの信號となれり、彼等は西歐に旅行して種々なる新智識を得たり、然れども彼等を最も深刻に刺激せるものは西歐諸國の社會問題なりき、彼等はプルードンを讀めり、ラッサレ、マルクス、バクーニンを讀めり、彼等は之を讀んで自ら覺醒せしのみならず、直ちに此等の書を本國に傳送したり、かくて露國貴婦人中にすら、ラッサレ、マルクス等の名を以て其小兒に洗禮を授くるものすらあるに至りぬ。

（以下九面へ續く）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

▲保守的反動

一八七一年の巴里コムミュンは露國の青年男女を刺激せしと甚大なりき、殊に露國の志士ラヴロフ及びバクニーンが佛國平民の勇進に與して而も首要なる運動を自ら爲せし事は如何に全國人の心膽を鼓舞せしめしよ、されど政府は之を見て以て恐怖の眼を開きたり、アレキサンドル二世が改革の方針は一轉して保守的反動となりぬ、自由主義に對する壓制束縛となりぬ、然るに此時に當り、西歐に遊學せし青年男女は熱烈なる革命の氣闘を懷いて續々に歸來せり、是より政府と改革者との衝突は漸く激烈となり、而して改革者の運動は増々有勢となり、増々猛烈となりぬ。

▲秘密結社

當時露國に在りし秘密結社は大別して之を四種とするを得べし、第一をマリコウ派となす、平穩なる自由鼓吹者にして其同志も多からず、マリコウと稱する人を其首領とせるが故に此稱あり、彼等は自ら呼んで「神人」(God-men)といふ、蓋し彼等は各々の人が悉く「神靈の光」を有すとなし、此故に人は皆な平等にして同胞たりと主張するなり、露國のクエカー教徒ともいふべき乎、第二をバクーニン派となす、即ち其の行爲の「傳道主義」を採用せる一派なり、但し此一派も一八七五年に至るまでは此の「行爲」の實行を思ひ立つに至らざりき、第三はラヴロフ派となす、ラヴロフは始め露國の陸軍の大佐たりしが、一八六六年のカラコゾフ事件に際して嫌疑を蒙りて追放せられ、脫走して西歐諸國に轉じ、巴里コムミュンの起るや、之に加盟し、爾來露國學生の多數を存する瑞西ヂューリッヒ市に於て一新聞を發行して以て祖國の革命を鼓吹したり、露國内のラヴロフ派は即ち其新聞を秘密に輸入して諸方に分配し、且つ資金を醵集して之をラヴロフに送致するを其務となせり、ラヴロフは自國自治市政の保持に努力するの無益なるを思ふて、漸く獨逸社會民主黨の主張に接近し、土地資本の國有を唱導するに至りたり、第四は露國革命運動に最も重要なる職分を務めしものにして之をチェイコウスキー團體と稱す、一八六九年當時猶ほペテルスブルグの一學生たりしチェイコウスキーの創立する所たりき、其團員數頗る多く、且つ教育あり、熱誠ある有爲の青年男女を多く網羅せりき、例へば、クロポトキンの如き、ソフィア、ペロウスカヤ、セルギアス、クラウヂンスキー、(ステップニアク)の如き、ロガレヨフ、リーニダス、コルニロフ姉妹の如き、其名最も著はる、此團體は最初協同の修養を以て唯一の目的とせる一種の倶樂部なりしが、漸く政府の壓制を受くるに至りて反抗的運動を起すに至りしなり、一八七四年より一八七七年に亘りて行れし大疑獄、被告人たる一九三人の社會主義者は多く此團體に屬するものなりき、然れども其延引せる裁判の結果は遂に其結社を消滅に歸せしめ、且つ其「人民の中へ」てふ大使命を秘密に歸せしめたり。

▲壓迫益々嚴酷

是よりして政府は増々猜疑の眼を以て新思想の傳導者を目するに至れり、露國内に於ける如何なる僻陬の地に於ける農民傳導者も最早政府の猜疑を免るゝ能はざるに至れり、一八七四年にすら地方に於ける欽捕者七七四人の多きに達せし程なりき、ヂューリッヒに於けるラヴロフの新聞は絶滅の聲を放てり、脫走革命家は「人民の中へ」の計劃が遂に失敗に歸せしを激歎するに至れり、此に於て彼等は二種の方針を選び之に各々投じたり、一は農民間に移住すると一は陰謀的にバクーニンの戰術を採ると即ち是なり、而して後種の革命家は一八七六年、即ち彼の老革命家バクーニンが死去の年に於て、オデッサ、カザン其他の地方に社會主義示威運動を行ひて地方人民の感激を惹起したり、されど露國の如く政府の專制力の強大なる國に於てかゝる公然の示威運動は到底成効し得べきに非ず。

▲威嚇運動

此に於て一八七八年以後、彼等は再び其戰法を改めて、是より有名なる「威嚇主義」の運動を開始したり、此年、彼の一九三人の社會主義者に對する大疑獄が終結するや其同志の一人たるウエラ、ザッシリッチてふ一少女の警察總監トレポフ將軍狙擊事件の勃發するあり、之を合圖として猛烈なる「威嚇運動」は俄に勃興し來り、數年間疾風暗雷、以て歐米諸國の人心を寒からしめたり、是より先き彼の多くの秘密結社は同志の秘密計劃を遂行せんが爲に合同して一體となり、最初之を呼んで「小部落」と稱し、次で「土地と自由」と呼びしが、一八七九年彼等は再び分裂して二派となりぬ。

一は即ち「民意黨」(Varolnia Volia)と稱して當時「威嚇運動」を以て其專門の事業となせり、此革命運動の首腦と言ふべき其有名なる「執行委員」は皇帝及び國務高官に對する死刑の宣告を發表し、高官五人を暗殺し、即ち死刑に處し、又た皇帝の暗殺を計劃する事五回にして遂に一八八一年三月を以て其大望を成就したり、されど此黨派の本來の改革意見は即ち社會民主主義的にして新帝アレキサンデルに對して彼等の先づ要求せしものは即ち憲法なりき。

他の一派は之を「Black Division」と稱す農民黨なり、露國人民中に一の舊き信仰あり、曰く、一朝土地が自治區の所有に歸せんか、其土地は日々に增加する自治區民に對して餘りに狹小なるべければ、須らく現在貴族の有する大地を收用して以て全國土の再分配を行はざる可らずと、此百年毎に行ふ再分配は即ち「Black Division」なり、此「墨分」派も他の革命黨と同じく「威嚇的手段」を採れり、されど彼等は憲法を以て平民に何等の利害關係無き一種紳士閥的要求なりとして之を顧みざりき、彼等は中央集權的政府に對して憎惡の感情を有す、蓋し露國革命家の遺傳的感情とも稱するを得べし、彼等は自治區の強大ならんことを希望せり、其各區々の新聯合の成らんことを待望せり、かくして此主義と運動とはアレキサンデル三世治下に於て最も重要のものとなりぬ、「土地を搭せよ　地代と租税を減ぜよ」てふ農民の喚叫の増々急激なるの時に當り、彼等の運動が其勢力を有するに至れるもの蓋し當然なりと言ふべし。

（次號にて完了）

▲旭山生曰、本編も從來掲載せし「クロポトキン」「カル、マルクス」等の諸編と共に予が獄中著作「西洋社會主義史」中の一部なり從て單行文としては甚だ不備なる點少からず、讀者希くは其心して讀まれよ。

●谷中村事件　眞相の暴露

谷中村買收事件の眞相は政府自ら之を暴露するに至つた、谷中村民の訴願は前にも記載せる如くなるが、政府は之を顧みるに遑なきにや、其訴願に對しては何等の裁決をも下さずして、谷中村の土地を堤地なる某煉瓦會社に讓渡したとのことである、けれども谷中村の土地を煉瓦會社に讓渡したのは、昨日や今日の事では無い。煉瓦會社が創立された時から、其材料土壤は之を谷中村の土地より採掘するの計劃であつたといふ噂がある、或は此説が事實かも知れぬ、果して事實とすれば、政府の處置は愈々不埒千萬と言はねばならぬ。

元來谷中村を瀦水池とするといふ事が甚だ無謀な、亂暴な處置である、故に之には必ず世間で知らない秘密があるに相違無い、必ず此沃土を手に入れたいと言ふ私慾を懷いて居る者があるに相違無いとは、久しき以前より田中翁初め、谷中村同情者の公言して居た事で、而も田中翁等の言は恰も神の豫言の如くに的確に事實となつて現はれて來たのである、「瀦水池」てふ名の下に村民を虐待し追放し、民家を破壞した此何は果して此無法の眞相を暴露するに至つた、吾等は之に對する攻擊を充分に披瀝すべきの自由を持たぬ、讀者希くは言外に察せよ

●本紙の公判

本紙第廿八號の「最初の祭」に對する被告事件公判は去月廿九日東京地方裁判所第二號法廷に開かる、立石裁判長が被告たる神崎順一氏の訊問を經へるや、檢事君の不得要領なる論告あり、次で辯護士志賀和多利氏の沈痛にして熱誠ある辯論ありしが檢事は志賀氏の辯論に足下危うしと覺りしにや再び立ちて『本紙の發行を禁止せられんことを望む』と述べ、之にて閉廷、判決は本月五日に言渡さる、筈

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

長文短章

▲母訓

「德山女學校長 赤松照幢師談」

『私は六歳の時に家を出ましてから、漂々浴々、あちらこちらに流れ渡て居りましたが、終に因緣あつて此德山に足を止めるとになりました』

『少フであつたが、何か用事の都合で、二三度續けて家にかへつた事があつた、道のりは三里半ばかりも隔つて居る。所が其あげくに母が私に向つて云はるゝには、あなたの樣に、そう、さい〱此家へ來ては、本當の人間になられませぬぞ、とこれは僅かに私が七歳の年の暮であつたと思ひます。『本當の人間になられませぬぞ』此一言は强く小供の心に響いたものと見えて、私は、此時から、最早や内へは歸られぬ、歸てはならぬ、親の側へ寄つてはならぬと思ひ込み、はたと内へ行くことをやめてしまつた』

『今や母死して十三年、私は依然として本當の人間になつては居りませぬ、で、せめて此期に當りて、久しぶりに故國に歸り、亡き母の墓前に跪まづき、心ばかりの手向けがしたいのは、願一ぱいでありますが、母の墓へ參るのは、内へ歸るのと同じ事に思はれて、どうしても行く氣になれませぬ、されば、自分はいつ本當の人間になつて内へ歸へられるのであろうかと思へば、私の胸の中は張り裂けるやうな心地が致します、いつまでたつても本當の人間になつて母の側へ歸るとが出來ないのであろうかと思へば……」(筆者曰く、師、語つて茲に至り、歔欷流涕稍之を久しうす)

「今日私が斯る處で、拙ながら一場の御話をしてあなた方に聽いて頂くとの出來るのも、誰の御蔭であるか、皆是れ此の親切の結果、母の慈悲の力のあらはれであります、母が何とかして私を本當の人間にしようと思はれた一念が通つたのであります。實に此『本當の人間になられませぬ』の一語は私の一生涯を支配して參りました。如來の本願、根喚の勅命が有り難いと申しますが、私は成程有り難いには相違ありませぬが、母の此一言を感ずる程に、實は感じて居りませぬ……私に取つては、南無阿彌陀佛の六字の謂れよりも『本當の人間になられませぬぞ』と云ふ母の一言の方が意味がつよくとれます」(中外日報より摘要)

▲女界の英雄富貴樓お倉

「東京エコーより摘錄」

『お倉の生れたのは淺草の藏前、現の松葉町である、……父は川村屋丑之助と云つて、此邊第一の顏役、兼て公儀の目明をも勤めて、藏前の頭と立てられた、が一飛な改革家たる水野越前が『御趣意』を振廻して行つた大改革の爲に家は取潰され、お倉の父と祖父の德次郎とは大島へ遠島、お倉は知邊の家へ引取られたが、其美しい顏を資物にされて、間も無く淺草の奧の『上野』と云ふ茶店へ出された、之ぞ彼女が波瀾多き浮世の巷へ泳ぎだした初である』

『間も無く幕府の鐵砲御用達の杉屋鐵六と云ふ粹な男と思い思はれて夫婦になつた、媒介人は新門辰五郎である、すると鐵六が病氣に成て、家は左り前、如何にも仕樣がなくなつた時に、お倉は自ら進んで身を新宿の豐倉屋へ賣つた、時に安政五年十二月である』

『彼女が永い間に接して多數の男の中から只一人の亭主と定めて一生を迷惑つた縁の龜次郎は、此時初めて彼女と會つたのである、龜次郎は幕府の植木御用達を勤むる高田の植木屋の息子で、手の附けられない道樂者であつた、其頃彼は堀の小萬と云ふ名高い俠妓の情人に取られて居たが、友達の斡旋で一度お倉に會つてからは、英雄英雄を知る、互に面白い相手だと思つた、而も逆上た方はお倉の方が强く、幾日經つても容易に歸さない始末、小萬とも云はれる妓が其名前に對しても默つては居られない……一日一人箱丁を供に、遙々と新宿へ出掛た』

『さて會て見ると、前に思つたよりは大分違ふ、高が馬糞街道の飯盛!と蔑で掛つたお倉の容姿なら擧止態度、女が見てさへ惚々する、此は敵はぬと身を退いて、お倉と龜次郎との間を纏めて遣た方が好いと悟つた、『お倉さん、もう何にも仰いるな、龜さんは貴女のものです、其變り如何な事があつても一生見棄ては下さいますな』と泣く、お倉も其心に感じて『必ず立て通しますから』と誓つた、それでは復會ふ迄の紀念と取交はしたのは重ね草履と吾妻下駄の片々宛、敵は忽ち姉妹の約束となつたのである』。

▲宗教者の妻

「前田慧雲師談」

『近來は女學生上りの妻君ばかりでなく昔の女大學で敎育せられた夫人達も、ヤレ婦人會だとかヤレ慈善會だとかいつて男子も及ばぬやうに奔走盡力する傾向があつて、之が爲めに外にばかり働くことになり內助といふことは少しも出來なくなつて居る、隨て坊守たる人も亦た此の弊風に陷つて御法儀を勸むるどころか自分の子供までも人委せにして、外にばかり働いてゐる人が間々あるさうだが、之は大に誡しむべきことである全體坊守といひ宗教者の妻といはるゝ人は、世間普通の夫人とは違つて常に其上に立たなければならぬのである、そして一般の婦女子の模範として行狀を慎み品性を養はなければならぬ、それに却つて俗流を追ふなどのことがあるのは甚だ嘆はしいこと、思ふ、私は婦人に對しては餘り多くを望まない、多くを望むのは却つて無理である、そこで出來るだけのことを希望するのであるから、坊守さん方は、常に自分は人の師表となるべき宗教家の妻であるから、其妻としての任務を守らせなければならぬといふことを片時も忘れぬやうにして他人の惡口いふ暇があれば念佛を稱へ、又た陰言いふ時間があれば御法儀の話などして、一人たりとも御信心を戴かせて喜ばするやうにせなければならぬのである、そして子供に向つても常々佛恩の有り難きことを知らしめ、佛祖に對する敬ひの念を起させて、之を大切にするやうにせねばならぬ、そうするには先づ自分が平常の品行を愼み行儀を正しくしなければならぬ、私は、この坊守の平素の間接的布敎が、其寺の住職の傳道の上にも大なる效果を與ゆること、信じ切に之を坊守に希望するのである(中外日報)

▲社會主義者の立場

「社會新聞社說」

『抑も社會主義は近時我朝野の人々が批難攻擊するが如き下劣なる者にあらず、學說として將た社會哲學として夙に學者政事家の間に定評ある者なり、然り而して世界の運動としての社會主義、社會革新の政事運動としての社會黨は更に此學說、哲學、科學よりも一層大なる事實なり、勢力なり、人類社會の要素なり、今や同じ旗幟の下に同じ宣言綱領を以て同一の理想を抱き之が主義の爲に奮鬪せる同志少なくとも一千四五百萬人あり、其諸國會議員選擧の有權者のみにても實に七百萬人ありて、國會代議士は四百二十餘人あり、彼等は何れも斯主義を以て選擧せられ、斯主義の爲に活動せる者なり、斯く社會主義は決して我朝野の人々が云々するが如き賤劣淺薄なる者にあらず」(十月十日第四十八號)

▲食はさるを義とす

「田中正造翁手紙」

同胞食はされは我等食はざるを義とするなり、我は食ふて人民の飢ゆるを傍觀するは義にあらず　況んや罪人のために謗られて食を奪はれて將に飢んとするものありとせんか、之を奈何、谷中一千町歩茫々、人民菜色將に飢に近付けり。

▲すみ衣のうら

「住田智見氏講話」

同師(京都專修寺派部學行師)同く山命を帶びて、三河の碧海郡を巡回されたことがある、尾張の某壯年の布教使隨行として、或る大地の本堂にて、非常の群參の中で、一席の開口をつとめ師の側へ來ると、師大に激賞せられた『貴公は中々の名人である、說教はうまいものだ』と賞をつくして讚嘆せらる、然るに本人と、師の控席とは幾分隔たゝりて話の聞こゆべき筈なければ、某和尚は私の開口を御聞きでしたが」と云へば『イヤ聞かなんだが貴公は名人だ』と云はるゝに某ます〱不審に堪えず、師曰く『下手なものは長くなるが貴公のは短かゝつたで名人だ』――『是れ迄は好かつた、が、併し名人は不親切なものでなあ』と云はるゝに至りて『穴へでも入りたき心地して冷汗背を濕すを覺えたんだ』、と、某布教使は語られた。(無盡燈所載)

米國天幕生活

「女子大學卒業生井上秀子氏が母校への通信」

『私事今はニューヨーク州の首府オルバニーと申す所を去る二十哩なるオルテモントと申す山上に開かれたる天幕生活に暫く暑を避け務ら志し、專共研究いたし居候』『この湖畔の今を去る十一年前迄の程四十年の某未亡人が、此の婦人に清き慰安と休養とを與へん爲めに東奔西走其の資を得て、こゝに三十エーカーの地と主要の建築物其の他數十の天幕等を得て開かれしものにて今尚其の夫人は此處に來りて已れ等の生活を導きつゝあり、(家庭週報所載)

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

小說 魔（七）

モーパッサン著　二葉應覺非譯

七月十九日

私は面會人每に此不審議な事件を話して聞かせたけれども凡骨には到底信じられないと見えてフ、ンと云つた限りで取り合ふ者は無かつた。私も最早何が何だか全く判明らなくなつてしまつた。でも少々物の分かつた人間だけは眞面目腐つて。

「そこですかね。いやそんな事もあるかも知れませんね」と云つた。

七月二十一日

今日はブーギバルで晝餐をした。晩は海員倶樂部で遊び暮らした、如何なる事で居る場所と周圍の情態に從がつて考へを異にするものだが此蛙島などに來て居ながら超自然の事實などに信を置くなんて事は馬鹿い骨頂だ……。

だがセン、ミセル山の頂上では？……又彼の印度では……。

私は周圍の情態の爲非常な恐怖を感じた。次の週には是非歸宅しよう。

七月三十日

昨日歸宅した。何も其後變異はない。

八月二日

別に異狀はない。日本晴れの上天氣だ。終日只セーヌの流れを見て暮らした。

八月四日

下僕下婢共が朝つぱらから大喧嘩を始た。奴共は昨夜迄茶椀棚に置かれてあつたコップが知らぬ間に破れて居ると云つてお互に罵詈し合つて居る。

車夫は料理人を料理人はお三をお三はお三で此三人を互に責めて居る樣だ、何時迄行つても果しはない。誰れが破つたかは只神樣が御存じなだけである。

八月六日

此度こそは私は眞面目だ。狂ては居ない。私は見た……私は實見した……私は確かに見た……最早私は寸毫も疑ふ余地はない……私は自分でそれを見たのだもの。

午後二時に私は花壇に出て薔薇畑を散歩した。折から眞晝の太陽は赫々と照り輝やいて目も眩む計りである。

私はとある一株の薔薇の前に歩を止めた。

これは有名な「勝利」と云ふ薔薇なので今年は三つも蕾を付けて居た。

見て居る内に其枝の一本は段々私の方へ向いて曲がつて來る。其工合がどうしても誰れかが手に持つて曲げて居るとしか思へなかつた。其内に枝はメリ／＼と云ふ音と共に折れた。折れた花は枝に付いた儘、フラ／＼と空に浮いて居る。紅色の花は強き太陽の光りを浴び、血の樣に見ゆる。地上五六尺の處まで上がつてヂツと浮いて居る。魔物が紅い花に接吻して居るのだと思ふ。と思ふとゾツとして首の付け根が麻痺した。脚はわく／＼として重く足はスーツとして輕るくなつてしまつた。眼がくら／＼になると何も見堺がなくなつて只一點の眞紅の塊が眼から三尺許りの處をフワリ／＼……。

無我夢中で私は夫れを探うと手を出した。煙も殘さずパツと眞紅の塊は流れて……。姿は消えた。恐れに震るい怒に燃えた儘立ちすくんだ。立ちすくんだ儘考へた。これは只錯覺に過ぎなからうか？。私は直ぐに幹の廻りを調べて見た。間違ひもなく一本の枝は茂りの中に折れて居る。他の二本の枝は元の儘だ。蕾も奇麗に付いて居る。私は非常な惱みを持つてフラ／＼と部屋に歸へつて來た。私は確かに晝夜の別も付かなくなつて居るのだらう。私の身邊には晝も夜も絶え間なく物の怪が付き纏つて居る。而かも其奴はミルクと水とで生きて居るらしい。そして見えぬ手に器物を持ち我々人間と同樣に地球の引力に反對して物體を持ち運ぶ能力を有して居る。而かも一個の個體として我々と同樣に人家の中に生活して居ると外思へない。

八月七日

安らかに眠むつた。物の怪は相變らず出て來て私のコップで水を飮んだ。而かし私は覺めなかつた。私は自ら顧みて己れの狂つて居ないか否かを疑がつた。

私はセーヌの河邊を散歩しながらツク／＼考へた。私の健康には障碍はないのだらうか？。私は果して心身共に健やかに暮らして居るのだらうか。考へて居る内に私は何時かこんな事を思つて居た。私は曾て狂人を見た事がある。その事を思ひ出して狂氣の狀態を研究して見た。

狂人とは全體如何な者を云ふのだろう。私は曾て非常に才智あり謀略ある一人を見た。其人は何事にも拔け目なく其豐かな才智を働らかしたけれども只一つ……只一つ確かに其人は己の斷乎たる識見を有て居たアル一事に關してのみ非常識であつた。如何なる問題に關しても快活に神秘的によく語つた。而かも其人の考へが只一つ……其只一つの點に及んだ時突如として彼れの心は浪立ち恰も荒海の磯の大巖に立ち騷ぐ浪の一列が打ち付けて碎けて散つて霧となつて亂れ飛ぶ樣な狀態となる。其時に人々は彼れを捕へて狂氣した！狂人だ！と呼び叫ぶのを常とした。

。。。。。。

キュチキュラ石鹸

夏はキュチキュラ石鹸を用ゆる婦人の天地也

キュチキュラ石鹸を使用せらるゝ婦人は夏は益々艶色を增して生れついたる美貌を輝かし給ふを得べし

之に反してキュチキュラ石鹸を使用せざる婦人は暑熱の爲に肌を犯され蚤や蚊に螫されたあとが較やもすれば腫物となり或は汗疹の爲に肌が汚なくなるべし

キュチキュラ石鹸を用ひ玉ふ婦人は暑くなれば暑くなるほど美人たるべし

キュチキュラ石鹸を用ひ玉はざる婦人は少し暑くなれば忽ち散三なり美色は瞬間に消ゆるべし

丸善洋物店

各唐物店小間物屋藥店等にあり但し贋物御注意のこと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文學博士 法學博士 男爵 加藤弘之先生著

迷想的宇宙觀

昨年八月「吾國體と基督教」を刊行せし以來其批評紛々として既に數十種に上れり仍て今般その批評に對して更に批評を試み且つ簡短なる二大問題を擧げて讀者にその解答を乞へり基督教が迷信なりや否や又吾國體に有害なりや否やはその解答の如何によつて解決せらるゝを得べしと信ず大方の君子重ねて批評せらるゝこともあらば幸甚

著者 加藤弘之敬白

定價金七十五錢 郵税金八錢

ワーナー、ファイト氏原著 東洋大學講師 中島德藏先生著

解說批評 倫理學原論

ワーナー、ファイト氏の『倫理學原論』は快樂論と觀念論との二大立脚地の調和を試みし者にして理論的に卓拔の見に富みしのみならず又當時社會の實際問題を提べてこれに明快なる解答を與へし一新好著なりこれを以て吾國にても大島博士の飜譯によりて已に紹介せられつゝあり然るに譯文に慣れぬ讀者は往々その眞意を解する能はざるを遺憾とし之れが解說を求むるもの少からず仍て一々質疑解答の勞を省かんため各篇各章の順を追て殆ど各節毎に其の大意を取り最も簡易に明瞭に讀者をして原著者の意を窺はしめむと力み且つ讀過筆錄の際卑見を以てこれに批評を試みたるものは書本なり

述者 中島德藏敬白

定價金五十五錢 郵税金八錢

文學博士 村上專精著

女性訓

定價四十錢 郵税六錢

東京市小石川區原町六 丙午出版社 振替貯金口座一五六八六番

商店改築大擴張

カルタ歯磨は 口中にある諸種の細菌を殺します

カルタ歯磨は 齒牙のゆるみを緊縮するの効がある

カルタ歯磨は 口内の 臭食物滓渣の腐敗を防ぐ

手巾類種々 造花類種々 西洋小間物

東京市京橋區尾張町二丁目八番地 電話新橋二七六七番

光明堂

カルタ歯磨は アルカリ性なれば口内醱酵を防ぐ

カルタ歯磨は 最も微細の粉なれば歯を磨耗せず

カルタ歯磨は 常用すれば口腔歯牙の諸病を防ぐ

歯科治療 吉瀬歯科醫院

自午前八時 至午後十時

院主 吉瀬才市郎

東京市神田須田町二十六番地 (萬世橋内右横町)

●藥價手術料共半額

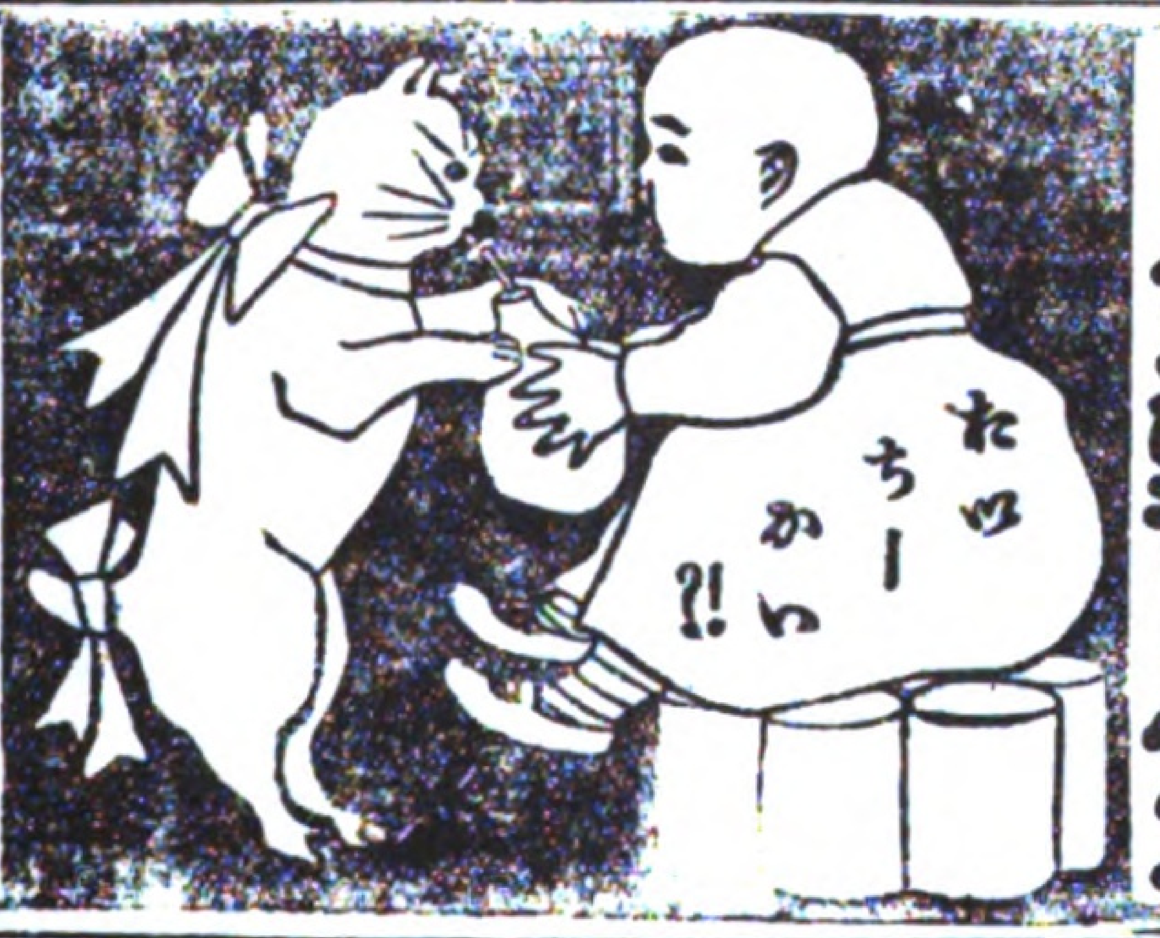
●貧困者施療

小兒科 内科 婦人科

毎日 自午前八時 至午後六時

淺草區馬道町三丁目

小牧醫院



伊豆三島 花島煉乳場製 名譽ある

金鷄ミルク

發賣元 東京市日本橋區大傳馬町 逸見山陽堂 (電話浪花二一九五番) (振替貯金口座三九六番)

涙紅醫院長 醫士 一瀬鷹一

一院 日本橋區蠣殻町二丁目十四番地

二院 神田區連雀町十八番地

學生勞働者薄給者諸氏には藥價手術料共半減又は無料

◎七寶側御婦人用時計

●第壹號 正價金拾圓也

七寶側十三形片 硝子器械ヨルゲ ンシリンドル石 入龍頭卷裏面体 裁上圖ノ如シ

●第貳號 正價金八圓半

七寶側十三形片 硝子器械ヨルゲ ンシリンドル石 入龍頭卷裏面体 裁上圖ノ如シ

●第參號 正價金七圓半

七ツ側十三形片 硝子器械ヨルゲ ンシリンドル石 入龍頭卷裏面体 裁上圖ノ如シ

以上裏面七寶(赤、紫)(薄青)(淺黃)等ノ各種同價又數字羅馬數字亞剌比亞數字共同價ノ事

◎市外送料金拾貳錢

東京市京橋區尾張町貳丁目 振替貯金口座一九六六 時計及寶玉類内外觀賞金屬類衛生品 商 天賞堂本店 電話新橋 特三三三、三一一三

電話(東七三三) 天賞堂大坂出張所

電話(本二六〇) 天賞堂神田出張所

電話(八七六) 天賞堂横濱出張所

電話(二二九) 天賞堂長崎出張所

根本正君譯 片岡健吉君序

日々の力

紙表紙三十五錢 クロース表紙五十錢 郵税六錢

本書は一月一日より十二月卅一日に至る一年三百六十五日間に於ける居家處世の大本を示したる者にして、毎朝其當日の部を一頁宛讀むべき者とす、世人之を繙いて反覆讀誦せんや、新氣力新生命は自ら其の間に生じ來りて無限の快を得べし、故に聖書と等しく一般家庭に必ず備へられんことを推薦す。

日本メソヂスト監督 本多庸一先生

說教集

紙質精撰寫眞入金六十錢郵税八錢

是非先生獨特の通俗的思想を以て深遠の眞理を極めて平易に懇切に說話せしもの、今日までありふれたる飜譯的口吻なく先生が特創の思想を以て日本の人情に投合し一言一句除腐媚々として感興措かざらしむ請ふ一本を座右に置かれんことを

パウン博士著 小山正武氏譯

基督教大啓論

定價金二十五錢 郵税金四錢

今や世界生存競爭の洪潮大濤は彌々益々激しく地球を震撼しつゝあるにあらずや、此の大試煉に逢ふて屈せず撓まず奮鬪猛進向上し以て善々其の靈的覺醒を完ふし以て善々其心靈の平和を永續し得べきの途は他に非ず唯敬虔を以て聖書を活讀し、之を實行するにあるのみ、パウン博士の此著極めて簡明、聖書研究の第一義を示せる者實に今日初心信徒の爲めに不可缺的指針と爲り燈臺となるべきは此書也

ジヨン、アール、モット氏述 瀧浦文彌君譯

活ける基督信徒

定價金三十錢 郵税四錢

救治家庭モット氏を知る者は多し而かも靈活の氏を知る者少し、氏が十餘年青年幹事としての經驗見聞に基きし本書は正しく偉大なる人格の反映なり、發露なり、之に依りて其の今日あるに至りし所以を曉る時人は、身に少なからぬ感化を認めざるを得ざるべし 敢て諸君の購讀を乞ふ

ジエルドン原著 美山婦人、田中榮兩女史譯

七日間

定價金三十五錢郵税金四錢

道に迷ふた人の子が、たうとい愛の力によつて救はるゝ、世にも美しい物がたりを、じいて筆に寫し出した此の本は、今の世のとして極めて適當なものでは御座いますまいか、迷ふ人も救はれた人も是非一度は御讀みなさいませ、そして此の小さい一冊の中に深い教へと盡きぬ趣とは御見出しなさるならば譯者二人は苦心の空しからぬを喜ぶで御座いませう

其他諸大家の名著澤山有之候品切にならざる內至急御注文を乞ふ

內外書肆 東京銀座四丁目 教文館 電話新橋二五二七番

◎定價 ▲一部六錢●十部五十五錢●二十部壹圓 ▲申込は總て前金の事

發行兼編輯人 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七百三十八番地 石川三四郎

印刷人 東京市牛込區[illegible]町三十一番地 井口正之

發行所 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地 世界婦人

印刷所 東京市神田區[illegible]町[illegible]番地 博[illegible]